

書評編集委員会

1985.12.10
第76号

書評



書評 76号(12月号) 目次

特集 小川雅也先生を偲んで 4

山村嘉己／加藤美雄／平田重和／野浪嗣生
小川 悟／渡辺幸博／中農晶三／橋本昭一
上田惟一／中所聖一／田中讓司／青木義尚

連載 小説の中の異境 (その1) 池田 浩士 26
— ロマン主義文学論序説 —

聞き書き・部落に生きる人たち⑨ 田宮 武 42
部落青年としての自覚を

研究余滴・ヴェルレーヌ 2 山村 嘉己 70
サチュルニヤンの自覚

日本中国ことばの来往 その22 芝田 稔 79

羅 針 盤 2

お知らせ 87

編集後記 88



いじめ解消策を急げ、首相文部省に強く指示、という比較的小さい見出しで各商業紙に記事が掲載されたのは10月4日の朝刊だった。

それ以降——もちろんそれまでもたびたびいわゆるいじめによる小中高生の自殺や事件などが社会面に登場することはあっても——いじめ問題に対する記事の扱いが異例のスペースをさいて掲載された。

文部省の発表によれば、いじめ被害の「重症例」は、五百二十三件ののぼり、うち六割は登校拒否者であるという。そのいづれもが親、教師が学校内で処理し切れず専門機関に相談を求めているとされている。

社会面に掲載され始めた具体的な記事も、結びにかならず「担任教員は気が付かなかった」「訴えに耳をかしてもらえなかった」と付け加えられているのが特徴的だった。臨教審が発足する一年以上前から教育現場をめぐる「事件」にマスコミがスポットライトを浴びせ始めていた。

当時は「校内暴力」が、そしてそれに対する現場教師の対応が主だったように記憶する。新聞に取り上げられニュースやワイドショー形式の番組のためのテレビカメラに校舎や生徒、教師の行き交う姿がうつし出されるとたしかに何だか今までと違う「教育の荒廃」の一断面を見せつけられる気になったものだ。しかし冷静に考えて

みればあの程度の「校内暴力」など10年ももつと以前からありふれていたものだ。私事であるが私の地域の公立中学などは「荒れた」中学だった。女子トイレのドアはなく、日常的な恐喝行為や生徒の暴力などめずらしくなかった。それは誇張されたウワサとして町中に広がっていた。しかし生徒達は守るべき弱い対象や、教師や行政から弾圧を必要とするような存在ではなかった。皆たくましくそこでの三年を過ごし、翻弄されながらも明るかった。大学進学者こそ数える程であったが成人と呼ばれる頃には具体的現実のなかで社会と向き合いながら職に就いていた者が大部分だった。

彼らが事なく大学進学までの日常を送つたものに比し、出会うと気持ちのいい人であることはもちろんである。校内暴力にあきたらずついにいじめという生徒個人の資質や性格の問題にメスを入れそれに「気付かなかつた」担任教師や校長に責を押しつけることを通して遂に教育臨調と呼ばれるものが次の段階に來たなどという感が強い。10月中のいじめ報道は、10月22日臨教審総会を前日に控える臨教審各委員のいじめ根絶にむけた「決意表明」を朝日新聞に掲載することによって終止符が打たれている。そしてこの臨教審と呼応するように日教組でも10月末に各教師の一斉家庭訪問等を言及し始め、11月27日に開

かれた62回臨教大会において、臨教審でうち出されている「初任者研修制度」「教職適性審議会」との対決を出しながらも「いじめ、教職員こそが教育荒廃を克服しうる中心的存在」と教師の責任を自ら全面的に出している。

「初任者研修制度」は京都市で、「教職適性審議会」は東京都で来年度からの導入を検討中である。日教組が「反対」を大会で表明したところで何ら具体的行動方針とはいえない。教員だけでなく生徒もまた社会的存在であり教育現場で表現される「暴力」や「いじめ」は彼らの負う社会的矛盾が凝集されている。だとすれば、「校内暴力」や「いじめ」との対決は、教育現場に集中される教師の真摯な生徒への対応ではなく教師や教組がこれまで唯一の寄り所としてきた「憲法・教基法」の対象化¹¹国民教育の再検討と、専門職でもなんでもない労働者としての教師という原点を押しえながら、教育再編と対決するなかにこそ一筋の展望が見い出されるのではないか？ この姿勢ぬきの「いじめ」の克服は教師自らを綱紀粛正の道へと導びくものになりはしないか？

11月23日、ついに警察庁が「いじめ」についてのパンフレットを作成した。果たして監視の強化がいじめ克服につながるのか？

小川雅也先生を偲んで

小川雅也・略歴表

1934年 1月24日 大阪にて生まれる
学歴

1940年 伝法尋常高等小学校入学
1944年 道明寺国民学校転校
1946年 大阪府立高津中学校入学
1948年 大阪府立清水谷高校併設中
学転入
1952年 大阪府立清水谷高校卒業
1952年 京都大学文学部フランス語・
フランス文学専攻入学
1956年 同校・同専攻卒業
1956年 同校・同専攻修士課程
1959年 同上終了

職歴

1960年 羽衣学園高校講師
1965年 羽衣学園短大専任講師
1967年 関西大学専任講師
1970年 同上助教授
1976年 同上教授

研究論文

- フランソワ・ド・キュレル
- カミュの『誤解』
- モリエールのファルス
- J・アヌイの『メディア』
- La situation comique dans les
comédies de Beaumarchais (欧文)
- Tartuffe の解釈について
- Don Juan と「状況」
- Alceste 解釈について
- Les Femmes Savantes の解釈について
- Molière の〈不透明なことば〉
- Sganare Ue と Don Juan
- Le Bourgeois gentilhomme における
コメディ・バレエの意味について

共著

- 文学は何ができるか
- 知識人 その虚像と実像



- 1959. 9 L'œuvre 7
- 1960. 3 L'œuvre 8
- 1962. 3 L'œuvre 10
- 1965. 3 羽衣学園短大紀要 1
- 1966. 3 羽衣学園短大紀要 2
- 1968. 3 関大「仏語・仏文学」4
- 1968. 11 関大文学論集 18.1
- 1974. 5 関大「仏語・仏文学」7
- 1975. 11 関大文学論集 25
- 1975. 12 関大「仏語・仏文学」8
- 1976. 11 関大文学論集 26.1
- 1985. 5 関大文学論集 34.3.4
- 1972. 4 福村出版
- 1976. 4 創元社

小川雅也君の 残して行ったもの

山村嘉己

「魂と肉体の分裂を知った時、人間は劇(ドラマ)の時代にに入った」というのはユゴーの言葉である。彼はキリスト教により自らのうちに相反する二つの要素、すなわち、不死なるものと死すべきものとを抱えこんでいる事実を人間が知り、その結果、つねに二つの方向に引き裂かれた生きて行かねばならぬ運命を背負ったことを指摘したのだが、私は今、演劇を愛しつづけて忽然と去った小川君のことを偲びながら、この言葉を改めて自分に繰り返している。もしユゴーの言うように人間を魂と肉体とに分ちうるものなら、そして肉体は消えても魂は不滅であるのなら、小川君の魂よ、永久に死ぬことなくわれわれの周囲にもとおってくれと願いたいのだ、いや、正直なところ、私の眼前にはまだ小川君の現し身すら消えず存在している。二人で始めて作ったテキスト「若者たち」——このテキストはわれわれの誇りだった——を

開いて学生諸君に講義をしている時、彼にすすめられ、彼を打ち破るために努力したテニスのラケットを握る時彼はまだあの些か照れを含んだ顔をして私の前に立ち現われてくるのだ。私はその顔に呼びかける、「小川君、約束が違うのではないか。君がぼくの後を整理してくれるはずだったのではないか。こんなに早く逝ってしまうなんて」。しかし、たとえ魂と肉体とに分れていても、人間はその二つをきれいに離れたままで生きて行くことはできない。引き裂かれつつも共有すればこそ、まさに劇的なのだ。私は同じようにあの死の三日前に訪れた時の、彼の激しいまでの仕事への熱情を悲しく思い起している。朝来の発作に息を切らせながら、あの甲高い声で仕事への思いを語った彼の姿はたしかに劇的だった。もちろんその時の私の中に、彼との永遠の別離の予感など皆無であった。たんなる風邪のこじれと信じ切っていた私にどうしてそんな予感などがありえただろうか。しかし、今になれば、あの時の雨が、そして夫人の何とも言えぬ淋しい笑顔が、痛いほどの鮮かさを以て私に迫ってくる。小川君、ドラマと言うものはそのさ中にあつてはかえって感じとることのできないものかも知れないね、ちょうど台風の眼のように。

思えば関大に入ってから十八年が彼を知りえたすべ
の年月になる。それまではまったく面識がなかった。

お互いまだ三十歳代であったが、すでに老成の趣きのあ
った彼を見た時、こんな先輩がいたかなと思わず目を疑
ったものだった。その後、五つも違うわれわれでありな
がら、彼の方がむしろ年上に見られることの方が多かっ
た。それは正しく人間としての成熟度の相異であったの
かも知れない。しかし、人生への別れまで私に先立つこ
とはなかったろう。五年の歳月の違いは今、それだけの
距離をおいてふり返る時、これから成し得たであろうこ
とへの彼の無念の残心を痛いほどに身にしみて感じるの
だ。五十代はそれこそ人間のもっとも充実した盛りのほ
ずだ。彼の中で華咲くはずだった諸々の仕事を思うと私
の胸にも痛恨の歯ざしりが鳴り響かずにはいない。専攻
のモリエールの世界を私がそんなに深く知っていると
言えない。しかし、その論考の多くがテキスト解説など
とは異り、その現代への関わりの中にあつたことは言う
までもない。とくに「モリエールの不透明な言葉」など
に盛られる新しい角度からのモリエール像説明は私に鮮
烈な印象を残しているし、その他のモリエール論が専ら
演出面から焦点が当てられていることを考えても、彼の
興味がつねに現在の視点から照らし出されるモリエール

像にあつたことは疑いを容れない。そう言えば数年前に
渡仏した時は、一年の内に二百を越える演劇を見てきた
ことが彼の強い誇りであり、その時、アングラをも含む
現代演劇のあり方に強い興味をそそられて、その見聞を整
理し、新しい演劇観を編み出すのだと高らかに抱負を語
っていたものだった。今、その膨大な資料と彼の思想は
どんな暗闇をさまよっているのだろうか。

また、関大着任後、間もなくわれわれを襲った全共闘
運動の嵐に、ともに真向から挑んだわれわれにとつては、
基本的に大学で文学を研究し、講義することへの意味に
対する自責にも似た深い屈折があつた。昭和四十六年に
発表した『文学は何ができるか』はそのことへのわれわ
れの具体的な取組みの呈示であつた。小川君はこの時、
「文学に於ける負の領域」を執筆しているが、モリエール
らの古典主義の時代を《言葉が構築する世界を信じるこ
のできた幸福な時代》と規定しながら、しかしその内部に
すでに顔をのぞかせる言葉の秩序への不信を指摘し、それ
ならば《われわれを取り巻く世界の言葉がすっかりその
実体を失っている》現代の状況にあつては、むしろ《世
界の総体を描けない》《負の領域》こそが現代の文学に与
えられた場と結論づけている。すでに対象との密接な関
係を離れて散り散りに解体した言葉の渦をどのように受

けとめ、どのように再構築するか、古典文学を専攻する小川君が卒論指導などではことさらに現代文学を担当しようと努めていたのもこの理解があったからだこそと思われる。

このような小川君の姿勢は当然のことながら、一般教養科目の中にまで及び、大学教育の責任を問う「知識人論」では白人優位の世界に孤軍奮闘する黒人フランツ・ファノンの功績を称揚し、単に人種差別の解放にとどまらず、広く新しい世界観の招来を期待するところとなるし、現実の学園生活にあつては学生主任、学生部長代理となつて学生との篤実で理解深い接触となつたのである。価値の多様性とその可変性と思う故に、彼のすべての人・物に対する対応には見事な柔軟性があつた。しかし考えてみれば、この態度の裏にどんな深い傷痕と厳しい忍耐があつたことだろうか。

このように綴つてくれば、つきぬ未練と同じように次から次へと記すべきことが浮んでくる。しかし、今ももう過去を追うよりも、残されたわが身への強い警策である。小川君、今、私は君とともに、奇しくも君に三ヵ月先がけて逝つた重本さんのことも心に思い浮かべている。関大仏文の先輩として、われわれ二人をほんとうによく指導してくれた重本さん、乱酔のはてにどなり合うこと

があつてもいつも親身にわれわれをかばつてくれた重本さん、七年にも及ぶ沈黙の闘病のはてに、ついにそのまま永遠の闇に消えた重本さん、小川君、われわれは彼の物言わぬ身体を前にして何度語り合つたことか、要するに人間は生きていなければいけないのだ、それも身心ともに挫折なく生きていなければいけないのだ。しかし、その誓いも空しく、君は壮烈に、いやほんとは空しく私の前から姿を消してしまつた。二つの大きな導きを失つた私の前にも、死は依然として不気味な口を開けている。だが、小川君、私はその陰鬱な洞穴の前に、生きている限り続ける人間としての生きる道を、そしてとくに君たち二人とともに歩んだつきせぬ文学の細道を、そしてさらにまた、学生と学ぶという限りない幸福にみちた大道をせい一ぱいに歩みつづけて行くつもりだ、それこそが君たちへのせめてもの供養と信じつつ……。

やまむら よしみ(文学部教員)

小川雅也君を偲んで

加藤 美雄

今からほぼ十年前、関西大学の文学部に着任して、最初に胸をつかれたのは小川姓の教授が三人おられ、そのいずれもがそれぞれひとかどの人物であることだった。三人のうち小川雅也氏はフランス文学科の同僚として次第に交友を深めることになった。フランス古典文学のうちモリエールの上演史に興味をもつ同氏のやり方にはひそかに関心をもつて見守った。演劇の研究は上演の際の評判という面倒な問題がいつもからんでくるので、文献の点でとくに慎重に対処する必要がある。この文献と批評という感覚の世界に立ち入る分野では、小川雅也氏は特殊な才能にめぐまれていたことが次第に明らかになって来た。演劇という総合芸術にたずさわるものとして当然のことではあったのだが、その文献と感覚にたよる判断力の確立として、ほかにもたとえば手相を見る能力のすぐれていた小川氏、他人の論文などを美にすばやく見

事にその内容を評価する小川氏、そして対人間関係としては、長らく係わりをもっていた学生部長代理としての激職への対応に能力を発揮する小川氏、これらすべて文献と感覚の両面への有能さをしめす場面であったと思われる。

ずいぶん以前だが十二指腸潰瘍とかで学校を休まれたことがあったが、その回復の早さに驚かされたほかに、前にも況してテニスなどの運動競技に熱意を見せ、しきりに学園外の大会などに出場、いな出演して妙技をふるったことがあった。夏はテニス、冬はスキーと中年にはもつたないほどの精進ぶりを見せていたことを思い出す。そして賞にこだわっているように見えた。ブービー賞などという賞(最下位から二番目の賞)にこだわるほどの熱心さも同氏の若々しさのあらわれのように印象づけられた。スキーの伎倆はこちらがやった経験がないので分らないが、テニスではとくにサーヴが上手で、時には、神経質な一面を見せて、セカンド・サーヴを打ちこまれるときは、その相手をするのにこちらの神経をかきたてられるときがあった。これも同氏の頭脳の回転の機敏さをしめすものだったと思う。この第二サーヴにはよく手こずったことを思い出す。勿論私などよりはるかに腕前は上だった。また同氏のラケットはとくに特別の逸品

であつたせいもあつた。

小川氏に最後に会つたときの模様は印象的だつた。芦屋の市民病院の五階のベッドに伏し、奥様と二人のところを見舞つたとき（彼はその後二、三日で急逝したのであつたが）、彼は「先生（彼は私にいつも丁寧な先生といつていたが）は入院なさつたことがありますか？」と私に問うた。「ぼくは三回入院し、いずれも長期間だつたが、三回とも無事退院できたのですよ」と私。「ぼくもそうなるといいんだがなあ……」と弱々しくつぶやいて身体をベッドの上で反転した。奥さんが不安気にベッドの向う側で見守つておられた。「きつと直りますよ……」と気やすめをいつたのは、そのあとで悔いても及ばない自分の愚かさを見せたように思われた。立派な、しかし淋しい



ベッドの上の小川氏が不憫でならなかつたし、奥さんはそのとき小川氏の寿命を知つておられたことをあとから知つた。浅はかさは人間にはつきものだが、何といえはよかつたのが、しきりに思い返されるばかりであつた。空白となつた小川雅也氏の教室での穴がわれわれにこのほか、大きく、また深いものに思われてくるこの頃である。御冥福を祈りつつ。（一九八五・九・五）

かとう とみお（仏文科教員）

レジャーの時の思い出

平田重和

小川雅也先生と同僚になつて十五年。すぐ年上の先輩（人生上の）として学問上のことを始めとし、日常生活のことにおいても、物の考え方、余暇の過し方など何かにつけて刺激を受け、教えていただくことが多くあります。学問上のことでは、問題点のとらえ方、掘り下げ方など大変な刺激を受けました。しかし、同じ仏文学といつても専門領域も違い先生の業績を評価するなど私には

とうていできません。それで余暇の過し方、平たくいえばレジャーの方で御一緒する機会が比較的多いうちの一人でしたのでこちらの思い出を書いてみます。

先生と御一緒させていただいた主なレジャーはスキーとテニスでした。スキーは教員組合の「スキーの集い」に参加し、何時の頃からか「仲間」でした。テニスの方は私がお誘いし「仲間にした」のですが、スキーもテニスも一度やり出すと、道具仕立てに凝られることはもちろん、常に上達しようという意気込みは「仲間」たちの知るところでした。スポーツは健康のためという大義名分もありテニスは時間を合わせて週に半日、ほぼ規則的にプレイをしていましたが、遊びの中にも常に一ツ一ツのプレイを大切にしておられるところが感じられました。それに白他共に実力を察知する眼識は確かなものを持っておられ、テニスが楽しくできるように、組合せを作ったりする時には上手にペアを構成されるのでその点はすっかり小川先生おまかせといった感じでした。

スキーの場合も毎シーズンが遊びの中にも上達へのトレーニングということが常に意識にあり頑張っておられました。腕前はかなりのものだったと思いますが、急斜面の「コブコブ」の滑降がまだマスターできないと挑戦されていきました。晴れた日や吹雪の日、急斜面や緩斜面

など雪の上での先生の「雄姿」がいくつか鮮やかに思い出されます。

スキーもテニスも「アフター」というのがあって、夕食後の過し方などこれまた小川先生「指導型」で楽しく過させてもらいました。

スキーもテニスも、二人とも学生時代にはやらず、最近になって始めたもので、「我々、学生時代には何やってたのやろ。勉強ばかりしてたのかな!？」と喋って笑ったものでした。こうした言葉の裏には学生時代からやっておれば、もう少し「カッコヨク」やれたのにといい気が持が込められているわけですが、ギターは学生時代からやっておられ大変上手に演奏されていました。私は楽器は何もやりませんので、音楽の方の「仲間」ではありませんでしたが、時には他の先生方となされた「生演奏」は聞かせていただきました。

こうした思い出のイメージは書いて行けば尽きませんが、何事にも「交通整理係的」な役目をされ、アニメーター的存在でした。

あまりにも早くあつけない小川先生の死に、大きな支え、何か中心を無くしたような思いでとまどっている今日此の頃です。先生の御冥福をお祈りしつつ……。

ひらた しげかず（仏文科教員）

小川雅也先生を悼む

野浪嗣生

まったく、晴天の霹靂とはこのことであろう。先生のあまりにも突然の黄泉の国への旅立ちに、私達の誰もが啞然としてしまった。つくづく人生の無常を思う。

先生と小生とのお付き合いは、昭和五十一年、小生が関大へ奉職した時から同僚として始まったのだが、より親密なお付き合いを願えたのは、やはり何といつてもテニスを通じてである。あれは昭和五十三、四年頃の夏であったか、天理大の友人が毎年信楽でやっているテニス合宿に我々を招待してくれたので、二人して参加したのであった。小生は初心者、先生は高校に勤めておられる時にラケットを握ったことがあるとおっしゃっておられたが、率直なところ、初心者である小生にちよつと毛の生えた程度ではなかつただろうか。ともあれこの合宿参加のおかげで二人共テニスの面白さに開眼し、その当時は相当の腕のひらきがあつた天理勢に追いつき追い越せ

とばかり、二人して西宮のテニスクラブへ登録したのであつた。

当初は、先生に一日の長があつたとはいへ、それほど技量に差はなかつたので、お互い良きライヴァルと目していた。先生自身、「野浪君には負けへんぞ、と思つてた」と、小生に直に言われたことがあるので間違ひはない。のちに少々差がついたのは、先生の役職上の多忙と多芸多趣味、そして何事をするにも常に全力を尽くすという性格の故に先生のエネルギーが分散されたのと、ひるがえつて小生のテニスだけに熱中していた、その差にすぎない。

このようにして親しくお付き合い願えてから感じたことは、まず第一に、先生は何しろヴァイタリテイのある方だ、ということである。ことテニスに関することだけに限つても、例えば、ひとたび大会や合宿をやるう、という話が出れば（先生御自身の発案も多かつた）、最も積極的に推進し、面倒な幹事役もむしろ買ってでられて、人数の確認からコートの予約、宿の予約、さらには切符の手配など、一切のわずらわしいことを引き受けて、しかも平然と片づけてしまわれた。先生は、学科内では勿論のこと大学でもいろいろ重要な役職を務められたので、傍目から見ても「超」の字がつくほど多忙であつた

のに、先生が消極的な姿勢を示されるようなことは一度もなかった。前向き、前進、積極的——おそらく先生の哲学のひとつではなかっただろうか。

第二に、先生は人間がほんとうにお好きだったんだろ
うな、ということ。テニスクラブでも、最初は二人が入
会してただけなのに、いつの間にか仲間が六人、七
人と増えていた。これすべて先生のお誘いの賜物。「私、
大勢でガヤガヤやっているのが好きです」とは、やはり
先生自身の口から聞いた言葉である。先生の誘い方は、
決して無理強いはされず、それでいて相手に、やってみ
ようかな、という気を起こさせる、その手腕は実に自然
で見事なものであった。これは小生自身、先生にスキー
仲間に入り入れられたクチであるので実感である。小生
それまでスキーは一度もしたことがなく、あんな大層な
道具をさげていくようなものは一生することはないだろ
う、と思っていた。だから先生にお誘いを受けた時、初
めはお断りしていたのであるが、いつの間にか、仲間に
入っていたのである。しかし、やってみてこんなに面白
いものかと思ひ、今では先生に感謝している。

初めてスキーに連れて行ってもらった時のこと、この
年は豪雪の年であったが、雪景色を楽しみながら次のス
キー場へ車で移動していたところ、途中から雪の降りが

強くなり、道も家も山も最早視界から消え、眼前はただ
白一色となった。こんな光景を見るのは初めてなので、
少々興奮気味にその感動を口にする、先生は嬉しそう
な顔で「僕が声をかけて誘った人がそんなふう喜んで
くれたら、僕も嬉しくなるわ」と、はずんだ声で言われ
たあの口調を今も忘れられない。そうなのだ、先生は人
を嬉こばせることが本当にお好きだったのだ。自分がや
って楽しいことを、みんなもやってみてその楽しみを知
ってほしい、その楽しみをみんなと分かち分いたい——先
生はきつとこう思っておられたに違いない。

六月十六日、すなわち先生がお亡くなりになるほんの
半月ばかり前、教員テニスクラブの大会があった。ほと
んど一緒にテニスを始めていながら、公式の試合では一
度もペアを組んだことのなかった先生と小生は、初めて
この大会でペアを組んで出場することになっていた。し
かしこれは叶わなかった。今となってはペアを組む機会
は永遠に失われてしまった。小生の一大痛恨事である。

のなみ つぐお(仏文科教員)

何を書いたらよいのやら

— 小川雅也さんのこと —

小川 悟

あれはいつのことだったか。ある会議の席上で、横に坐ったのが雅也さんだった。物を言うたびに咳き込んでいた。風邪かと尋ねると、肺炎らしいと言った。肺炎なんか直ぐ治ると言うのと、うんうんと背いていた。私は、雅也さんが二部担当の学生部長代理を辞してから、ずいぶん長い間会っていなかった。彼は、学生諸君のためのセミナーハウスをつくるのに意欲的だった。そのために会議に出てきていた。学生主任、身体障害者等問題委員会委員長、教学部長代理、学生部長代理、そしてフランス文学会での幹事といった具合にたいへん多忙な年月を彼は過してきた。私も同じような年月を過してきたが、時折、雅也さんは、悟さんは、書齋に戻りたくないかと言った。雅也さんは、学究としてしなければならぬ大仕事を抱えているようだった。

雅也さんが突然逝ってしまったのは、咳き込んでいた

あの会議から、二週間もたっていただろうか。肺炎ではなく、肺ガンだった。新聞の訃報をみた私の友人が、私が見ると早トチリをして、私の家に電話をかけてきた。電話口に出たので、その友人は、何や生きてんのかと、安心したような失望したような声を出した。私はまだ生きているが、雅也さんは死んだ。

会議で昼食が出ると、雅也さんは、小さな卵の厚焼の切れとこれまた小さな鮭(彼はシャケと言った)の切身を弁当箱のフタにのけていた。雅也さん、なんで卵と鮭をのけるのかと尋ねると、子供の頃からうまいもんは一番後で食うねんと答えた。そして、悟さんもそうかと尋ねた。私も同じことをしていたのである。

物判りのよい雅也さんは、事が差別問題になると頑固になった。雅也さんは、自身の反差別の思想を持っていた。時折、この思想の劔を揮って、私にも斬りかかってきた。私が抗弁すると、悟さんは、まだまだ差別的やめと言った。私がそうやなと言うまで、彼は、議論をやめようとはしなかった。

お葬式の時に、焼香を消して退出しようとする時、学長が、雅也君の顔をみてやれと言った。出棺の前に、最後のお別れがあった。学長は、雅也君はもう行っちゃいよるぞと言って、何ともいえぬ寂しい顔つきをしてい

た。雅也さんは、いささか冴えぬ顔つきで花に埋れて眠っていた。雅也さん、えらい早よ逝ってしまうねんなど言った瞬間に、涙が溢れてきて、雅也さんがみえなくなつた。

以来、私は弱気になつている。

おがわ さとる（文学部教員）

雅也さんを偲んで

渡辺 幸博

私の部屋に、モンマルトルの裏道からサクレ・クールを描いたユトリ口の複製画がある。七年前、雅也さん（私は故人のことを、いつもこう呼んでいた）がパリ生活の前半を過ぎたベックレル通りからは、この寺院はほぼ真南に見える。丘の中腹の葡萄畑の前にある有名なシャンソン喫茶、ラパン・アジールの片隅で、ブランドイをなめながら、ともに過ぎた一夕も二度とくり返すことのできない思い出になつてしまった。花の都といわれるパリの街並は、なぜか私にとつて、もともと少しの華やきも

感じられず、むしろ何となく憂愁にみちているように思われるのであるが、この思いはますます深くなることであらう。

一年前、半期の研修が決まつた時、観劇のシーズンである後期を選んだと嬉しそうにいつていたのを思い出す。元氣だったら、今頃はパリの街を活歩していたはずである。あれだけ楽しみにしていたのだから、せめてあと一年、いや半年でも永らえることができたらよかつたのにと思う。非情な運命を恨まずにはおれない。

「まだ死にたくない。未練がある」。亡くなる一週間前、雅也さんはそういつた。「死線をさ迷つてきた」ともいつた。再度の見舞いを約束した私に「それまで退院しているよ」といつていたのに。あんなに早く亡くなるのは、つゆ思いもしなかつたので、いまにして思えば、何とも心残りを覚える別れになつてしまった。

こうして故人を偲んでいると、いろんなことがつぎつぎと思ひ出されるが、不思議なことに特別に記すべきことがあまりないのに気がつく。とはいへ、スキーの時の骨折とか、エジプトの空港でストップをくつた時とか、私にとって特記すべき事件の時には、きまつて雅也さんは傍にいあわせていた。私が関大の教員になつたのは雅也さんと同じ年であつたが、たまたま同居が近いという

こともあつて、ことのほか親密につきあつてもらつた。とくに趣味の大半は共通していて、スキートのほかにもテニス、チンドンヤ（私たちのつたないアンサンブルは、そう呼ばれるのにふさわしい）など、よく遊んでもらつたものである。ただ山だけは高所恐怖症を理由に、どんなに誘つても、ついにつてこなかつた。今年も夏山に誘つたら、やはり断られたが、十月からのパリ行きに備えて片付けておかなければならないことが山積していたのだから、これはもつとものことであつた。

そういえば、一度だけ、スイスのツエルネッツの自然公園を森林限界点ぐらゐまで一緒に登つたことがある。一緒にといつても、どうしても私の方が早くなるので、草原に寝転んで待つていたら、いつまでたつてもやつてこない。三十分ほどして探しに下りて行つて、大声で叫んだら、はるか上の方から返事が返つてきた。まともな道ではなくて、わざわざ細い道を選んだ結果であるが、分岐点で迷つた時、私の好みから推して、細い方を選んだということであつた。

たしかに、雅也さんは心遣いの細やかな人であつた。私などは馴れてしまつて、ふだんはそれほど感じなかつたのであるが、あれだけつきあつて、特別記憶に残るような事が少なかつたということは、雅也さんの人柄そ

のものからくる物柔かきのせいであつたと、いまにして思うのである。

もつとも、それは優しいとか、思いやりがあるとかいつた問題ではなく、雅也さんが基本的に他人の痛みが分る人であつたというところから来ていたのだと思つてゐる。事にのぞんでの考え方、たとえば、学生諸君との対応一つ見ても、そのことはよく分る。相手の立場に立つて考へるといふことは、なかなかできるものではないのであるが、雅也さんを見てみると、それが自然に行なわれているように感じられたものである。本当に惜しい人をなくしてしまつた。私にとつては同僚というより、気の合つた遊び仲間といつたほうがふさわしい人だつたが、それだけになおのこと、ひとしお淋しさを感じさせられる昨今である。

わたなべ ゆきひろ（哲学科教員）

合歡よ、眠れ

中 農 晶 三

六十年七月三日、本学経済政治研究所のコミュニケー
ション班研究会で、赤穂へ行った帰り、京都まで行くは
ずの文学部山村先生が、神戸で降りるといふ。「どうして
？」と訊くと、昨夜宿泊先の赤穂ハイツに、奥さんから
電話がかかってきて「小川雅也先生の病状が悪い」と
聞いたから、芦屋で降りて病院へ見舞いに行く、といわ
れる。そのときは、風邪をこじらせておられると聞いて
いたから、深く気にも止めなかった。

翌週の十日、今度は総合コース「現代社会と知識」の
打合せ会で、また山村先生にお会いした。すると「雅也
さんが亡くなった」と知らされた。「ええッ」と驚いた。
あまりにもあつけない別れ方だった。わたしは五月二十
二日の水曜日、二部の授業の帰りに、山村先生と三人で
天六の「たこ半茶屋」で、酒を酌み交したのが、雅也先
生との最後の別れになってしまった。

湯呑みに入った天汁あまじゆのようなだし汁に、たこ焼を入れ
て食べながら、吉四六きちよっくという麥焼酎を三人で飲んだ。お
二人は共著で出される教科書の打合せをなさっていたが、
宴も終りに近づいて、「またパリに行きます」といわれた
ときの雅也先生のうれしそうな顔が、忘れられない。「パ
リで新しい芝居を見てください」きれいな声で楽しみを語
られて、うつつらと微笑ほほえみまれた。わたしはその日、なん
だか別れがたくなつて「もう一杯飲んで行こう」と悪強
いしたことを覚えていふ。

五三年三月から在外研究員として、渡仏される直前
に二人きりのサヨナラパーティをするからと無理強いに
て、北新地の「スーレボア」へお誘いした。「森の下」で
静かに語ろうという魂胆だ。そのときも、雅也先生はパ
リで新しい芝居に触れる楽しみを、もの静かに、しかし、
うれしそうに語っておられた。こんなに洗練されたエス
プリで、芝居を愛する人も珍らしい。

雅也先生が肺ガンで早世された直後の七月中旬、わた
しは老母との約束を果たすために、家内と三人で奄神温泉
へ行った。紀伊田辺からバスで二時間あまり、山道を走
って行くと、緑一色の林の間に薄紅色の合歡あひまの花が咲い
ていた。うつつらとした紅色のかすみかが、わたしの眼に
とび込んだ瞬間に、わたしはなぜか雅也先生に会った気

がした。

中肉中背の合歡の木は、薄紅色の花をたくさんマリのようを集めて咲いている。そのもの静かで、もの柔かな風情が、どこことなくフランス文学者の雅也先生のふつくと美しい風^{ふう}手に似かよっている。わたしは宿の有軒屋のベランダに座って、日高川をはさんだ対岸の山を見上げた。すると緑濃い杉木立の間に、一本の合歡の花が、ピンク色の煙さながらに咲いている。わたしは旧友再会、今宵は雅也先生と語り明かそうと決めた。

日高川の溪流では、しきりに河鹿^{かじぶ}が鳴いている。

ルリリリリリリ……リツリツリツリツ。

夜が更けるにつれて、澄み切った浅瀬で鳴く雄河鹿の音は、雌を呼ぶ鳴声に変って行った。

リイツリイツリイツリイツリイツ、チツチツチツチツ。

あるいはこの変調は、わたしが雅也先生を呼び鳴声だったのだろうか。合歡の葉は、夜閉じて垂れてしまう。

なかの　しょうぞう（社会学部教員）

からみの人、小川雅也兄

橋本昭一

雅也さんは率然として姿を消された。

今年（一九八五年）の初め、天六学舎で会ったのが、最後だった。

仏文科の山村さんと、フランス文学関係の学会開催の件かなにかで話し合われていた。

教学部長代理、学生部長代理とたてつづけに激職を勤めあげられたあとであり、私が目下その職にあるのを気づかわれたのであろうか。

「わるいですねえ。私の方は最近こんなことに夢中になってましてねえ。これからは勉強を趣味にしようと思ってるんです。」

語尾まではうまく再現できないが、そんな趣旨のことを、やや低いものの、例の張りのある声で言われ、あとは会務ノートのようなものを覗き込みながら、日取りなどを山村さんと話しあっておられ、私は邪魔になっ

いけないとばかり、話相手を替えたのを覚えている。

雅也さんと何時何処で最初にお会いしたかは定かでない。スキーの合宿、テニスの合宿、その他教務関係の合宿などや、種々の会議等で何度か一緒にいる機会があった。年齢はすこし雅也さんの方が上であったが、山村さんを含めてまわりの親しいひとが皆、関西大学に就任された年が同じ昭和四十二年であり、私もその年に助手として本学に就職したという縁もあって、親しくおつきあいを願っていた。

話の内容は、ズバリ核心を突かれるようなものが多かったが、いつもはなごやかで、乱を好まれるタイプではなかった。

本年の春、定例の教員テニス大会があった時、常連の雅也さんの顔が見えないので、不審に思い仏文科の他の参加者に尋ねると、一寸調子が悪いということであった。

雅也さんの明るい野次は、こういう会合の時でも貴重であったので、またＡクラスにあつては、雅也さんのチームが出場しないと私のチームが最下位になる危険性があつたので、淋しい思いをしたのを思い出す。それだけが理由ではないが、雅也さんとコートをともにできなくなつてから、私のテニス熱も急激にさめてしまった。

いつもかなり高額のデカ・ラケを二本持ち歩かれ、生

真面目な顔で球を追つておられた。

合宿ではアルコールがはいると、持参のギターを奏でられ、多才ぶりを発揮されていた。

私はしかし、雅也さんとはテニスではなく、論争を通じてなかくしていただく契機をつかんだように記憶している。晩年の雅也さんとは論争の記憶がない。喧嘩をしかけても、相手にしてもらえなかつたという印象を持つている。

鋭い皮肉や諧謔が、姿を消し、フランス的軽みの世界で、重く受け止めたものを軽い言葉と態度で表現する術を学ばれたようであつた。あるいは生来、雅也さんのネイチユアーはそこにあつたのかもしれない。

晩年の何処かで、残りの短い人生を、人を傷つけることなく謳歌する決意を固められたのであろうか。

胃潰瘍で苦しまれたあと、なお学生部長代理を勤められたと記憶しているが、そのころすでに胃潰瘍ではなかつたのかも知れない。それでも明るい声に接しているうちに、病気はたいしたものではなかつたと、ついついこちらが思つてしまうように振る舞つておられた。

深刻そうな顔をして物思いに耽つておられる時でも、声をおかけすると、たちまち明るい顔に戻られ、周囲の同情を拒絶される意志の強い方でもあつた。

関西大学が毎年実施している地方父兄懇談会出席のため、岡山のホテルに着くや否や、電話で雅也さんの訃報を知らされた。しばらく茫然と立ち尽した。

お葬式の日も暑い日であった。蟬しぐれがとりまく本堂に安置された遺影を眺めていると、ふと雅也さんが黒縁の額から抜け出してきた、バック・スピンの打ちかたをマスターしたなどと話しかけられてくるような白昼夢に陥った。

主よ、雅也さんが生前多くの人に、慰めを与えたことを忘れ給うな。アーメン。

はしもと しょういち（経済学部教員）



さようなら、雅也先生

上田 惟一

雅也先生にはじめて会ったのは、一九七三年三月五日である。場所は野沢温泉の民宿であった。私は助手の三年目を終え、専任講師になろうとする頃だった。教員組合の委員として高尾先生とともに法学部から選ばれた頃、いろいろと聞いていった人物があるときいた。それは文学部の小川先生ということであった。なんと奇特なと一瞬思った。が後から考えれば、これも雅也先生の「好奇心」のなせるわざかもしれない。ともあれ、その人物にはじめて合ったのは、教員組合主催のスキースクールの場合であった。雅也先生は、組合の委員をやるのだから、組合の行事をも見ておこうということでも野沢にやってきたようである。

関西大学文学部には小川という姓の教員は三人いる。御存知の方も多いと思うが、いずれもただ小川といって

すませるには惜しい、いずれおとらぬ個性の持主である。スキー場であった小川は仏文のオガワマサヤであった。

スキーは初心者であり、当時は上級グループに入っていた同じ文学部の渡辺、植松両先生からみれば、ひよこも同然であったろう。スキー場から宿へ戻ってきてても賑やかだった。酒を楽しく飲み、談をおおいに楽しむふうであった。懇親会で順番がまわってくると、なんのてらいも見せず、ポツポツポーハトポツポーと大声でうたった。この時から仏文の小川先生は雅也先生となった。

その後、雅也先生とは、組合、総合コース、スキー、学生主任と長いつきあいをするようになる。教員組合は委員長が工学部の有安先生、書記長が雅也先生、副委員長が経と商の重田、寺尾の両先生、給与担当が社の石川先生といった陣容であった。私も書記次長としてお手伝いしたが、賑やかな組合であった。狂乱物価の時代の組合であり、「第二次人勧」が出たために延長戦をしいられた組合であり、疲れもしたが、最後までまとまって賑やかに行動した。今から思えば私なぞ余裕もあまりなく生真面目にすぎる若者であったが、それに比べれば雅也先生などは余裕があったと思う。人間と人生に「好奇心」を持って楽しむふうと見えた。

雅也先生は人の好人と見える。たしかにそうであつ

た。だが、これはいわゆるおつちよこちよいた的な人の好きではない。表裏を使いわけるなぞ、まったく性分にあわない人であった。素面であれ、酒に酔った時であれ、小川雅也は同じ小川雅也であった。自分の思うところを大切にすることがゆえに、他人の言うところもまず聞いて、さらに聞こうというふうであった。権力的な作法とは無縁な人であつて、人に自分の意見を強要しているようにとられることなぞ嫌いであり、苦手であつた。総合コースの知識人論だったか大学論で一緒になつた際にも、二部の学生主任と一緒になつた際も、これは変わるところがなかった。

スキーは、私がライバルであつた。最初に会つたのがスキー場だということからして因縁的である。雅也先生と私とのスキーの上達をめぐる目に見えぬたかいは十年以上続いた。当初、雅也先生はまったくの初心者であった。私は最初は二年（といつても正確には一週間ほど余計に滑った経験があるといふことにすぎないが）のリードがあるので安心していた。それが山田牧場での足ならしもあつてか、雅也先生に三年前だったか同じクラスとなつてしまった。その時「僕が最初にはじめた時に上田さんは二つ上のクラスにおつただけで、ついに同じクラスになつた」といわれ、「お互い意識しとるな」と思

つたのもつかのま、今年の三月にはついに抜かれてしまつた。……その半年もたたないうちにあなたを黒枠に入つた写真の中に見ることになろうとは。さようなら、雅也さん。私より十年先輩の雅也さん、思いどおりに人生を生きるには、もう十年あつても、それからさらに十年あつても、あなたには出来たことでしょうに。

うえだ ゆういち（法学部教員）

小川雅也先生のこと

中所聖一

親しい人、敬愛する人を喪つた者は、その人の思い出を反芻しはじめる。それは、あるいは、思い出というよりも物語なのかもしれないと思う。記憶の断片をつなぎ合わせるようにして、物語をつくる。そして、敬愛する人を喪つた自分を慰めるために、その物語を自分自身にくり返し語って聞かせるのである。

本来、そのような性質のものを、先生の教えを受け、今なお先生を慕い続けている数多くの学生・卒業生のう

ちの一人に過ぎないぼくが、ここに書きしるすことをお許しいただきたい。

六月の中旬、大学院に授業に来られた先生は、ひつきりなしに咳をしておられた。風邪をこじらせたのかもしれないと言いながら、いつものようにフランス古典主義理論を講じはじめられたが、咳の合い間に、懸命に言葉をつなぐといった御様子だった。学生の方から授業の中断を申し出たものかどうか躊躇している間に、先生はとうとう一時間半講義を続けられた。その授業は、先生の渡仏をひかえた集中講義で、二時限続きのものであった。先生は、休息をとろうともせず授業をつづけられる。そんな先生の姿に圧倒されつつも、ぼくたち学生は、ようやく、「お身体の具合が悪いようでしたら、今日はこの辺にしませんか」とだけ言つた。先生は、話しているうちに調子が出てきたんだが、と、しばらく考えてから、「じやあ、申し訳ないけれどそうさせてもらおうかな」と承諾された。その後、風邪の時には酒を飲んで寝るのが一番ですよ、などというぼくたちの言葉に、ぼくたちを人間的に魅了してやまなかつた、あの、はにかみを含んだような笑顔でうなずきながら、先生は教室をあとにされた。ぼくが学部でうなずきながら、先生は授業は厳格なものであつた。ぼくたちは、そのことについて、「小川

先生は厳しい」というあまりに端的な言葉で話し合ったものだが、それは多分に畏敬の念をふくんでゐた。授業中、先生が質問される時、文学上の基礎的な知識のみならず、「その知識をもつて、君自身はどう考えるのか」と、つねに問われていることをぼくたちは感じとつていたのである。それが、「小川先生の厳しさ」だったのだと思う。そして、その一方で、はにかみを含んだ微笑に象徴される優しさに魅かれ続けていた。

先生が入院された、どうやら肺炎らしいというしらせを聞いて、六月の終わりに、ぼくたちはお見舞いにかがった。先生は横になつて本を読んでおられたが、ぼくたちの姿をみると体を起こして、遠い所をすまないねと言われた。咳は、相変わらずであつた。具合はいいかですかとたずねると、あまり良くなつていない、薬が効かないようだといふ御返事だつた。それから、少しばかり世間話のようなことをしたのだが、先生は咳をしながらずいぶん話をされる。せつかく鍛えた脚（先生はスポーツマンでもあつたから）が細くなつてしまつたようだと、検査の連続で退屈している暇もないとか、先日桃を食べたら非常においしかったとか。ぼくたちは、先生にあまり話してもらつて困るのだけれど、先生はそんな気遣いを打ち消そうとするかのように、ユーモアをまじえ

ながら話された。お見舞いに行つたぼくたちが、いつのまにか先生にもてなされてしまつてゐた。早く良くなつてくださいと言つと、「うん、薬さえ効けば、明日からでも病院の中を走り回つてゐるかもしれない」と、言われた。病室を早目に辞そうとすると、「病院という所は、せつかく来てくれても楽しい所じゃないからね」と言つて返事に窮してゐるぼくたちを見て、茶目つ氣たつぷりに笑顔をみせられた。

先生は、世間話の合間にも、授業のこと、執筆中原稿のことなどを終始気にかけておられた。そして、学校帰りに立ち寄つた学生にさえ優しい心遣いをされるような人だつた。病の身である御自身で、見舞客をもてなそうとされるお人柄だつた。今思えば、ぼくたちはそんな先生の優しさにずいぶんと甘えてきたに違いない。

今度、先生をお見舞いにあがるのはいつがいいかなどと暢気なことを考えている頃、先生の死の報せを受けた。咳をおして授業をされた日から一ヵ月と経つていなかった。先生の肺を癌が蝕んでゐたこと、告別式の日時などを、ぼくはただ呆然と聞いていた。そして、学生の見舞いを先生は喜んでいてくださったらしいということを聞いたとたん、溢れでるものがあつた。先生の優しさが、ぼくたちのために慰めをのこしていつてくれたような気



がした。
ぼくは決局何を書いているのだろうかとう自問してみても、「小川先生のこと」ではなく、やはり、「先生を喪った自分のこと」を書いていいるのだと気付いて恥ずかしく思う。自分を慰めるための物語は、やはり、自分自身に語って聞かせるだけのものだ。「死にたいする札節は沈黙である」と、夫を喪ったある女流作家が書いていたのを覚えていいる。その通りだと思ふ。ぼくは、沈黙のうちに、ぼくの、小川雅也先生の物語を反芻し続けるだろう。そして、数多くの人々の心の中で、それぞれの小川先生が語られ続けるだろう。

ちゅうじょう せいいち (仏文院生)

小川先生の「ジュネス」

田中 譲 司

シユナイダーという人の名がそのままゲレンデの名前になつてゐる所がある。そこは随分急な斜面で、中途半端なスキーヤーを寄せつけはしない。斜面を一気に駆け降りると、ゆるやかなゲレンデへと続いてゆき、そこは陽だまりになつてゐる。

私はこの陽だまりを小川ゲレンデと名づけたい。いいえ、私はこれからもずっとそう呼びつづける。

野沢温泉スキー場にあるくだんのゲレンデで小川先生一行と落ち合ったのは、昭和五十六年二月二十七日のことだつた。先生は鼻の頭がまっ赤になつていて、「いやあ、山田牧場では氷点下11度の中を滑つて来たからね。」と、武勇伝を語つておられた。学生の私達と合流する前に少し足慣らしにという事で行つて来られたらしいが、どうやらそれは身体にこたえた様子だつた。

早速お手並拝見。という段になると先生の姿が見当ら

ない。あれれ？とあたりを見渡すと、もう「ワイン」なのであった。

ゲレンデと道をひとつ隔てた所に「ジュネス」という喫茶店があり、先生はまずここからスキーを始められたのだ。スキーはスポーツと信じていた私は、少しめまいを感じたが、同時に笑いがこみ上げて来た。これが小川流の「スキーを楽しむ」方法なのだなと。

私達一行は学生八名と小川先生、平田先生、野浪先生、そして野沢での宿を世話して下さった国文の青木先生の十二人となった。

皆で山頂まで登り、再びジュネスへ戻って来るというコースをツアーしたのだが、途中、青木先生と女の子達がシユナイダーの急斜面を避けて林道へ行く姿を見て、「彼は少々、Timidですね。」と笑っておられた小川先生がシユナイダーに挑戦し、雪だらけの雪ダルマになって、眼鏡をくもらせて、やつとこのことでジュネスにたどり着いたのは私が一本のビールを飲み干した後だった。

青木先生の知人が営んでいるジュネスのその名前は、小川先生が名付け親なのだそうである。もう四年も野沢へは行っていないが、小川ゲレンデを一望する所にこのジュネスがあるはずである。

私があつた一度この目で見えた小川先生の「ジュネス」

は、確かに野沢温泉にあつた。

先生が逝き、ジュネスという喫茶店の名がなくなつてしまつても、先生のジュネスと、赤い壁のジュネスと、この陽だまり、小川ゲレンデは決して忘れはしない。

たなか じょうじ（仏文・79度生）

「研究室にて」

青木 義 尚

歳月人を待たず。早いもので、小川先生が御逝去されたから、三ヵ月余り。私が先生に、最後にお会いした時から数えれば、実に一年半の日々が、過ぎ去つた事になります。が、未だに、大学へ足を運ばば、どこかで先生にお会いしそうな妙な錯覚に陥り、本当にあの方は亡くなられたのかしら、と何か不思議な心地で毎日を過ごしております。

私は、昨年の六月末より今年の三月末まで、語学研修と自己啓発を兼ねて、フランスに留学しておりましたがこれに先立ち、私は一度、小川先生の研究室を訪ねた事

がありました。留学準備のため、四月の初めから、ほとんど授業に顔を出さない私の事を、大変心配して下さい、一度研究室に寄ってみないか、とわざわざお誘いをかけてくれたのです。

多少緊張気味に、部屋を訪れた私を、快く招き入れて下さった先生は、開口一番、「今度、君の留学祝いも兼ねて、ゼミの子らと一緒に酒を飲まんか。」堅い話を想像していた私を見事に裏切つて、酒の話に、子供のように目を輝かす先生。フランスで有名な本屋さんの事や、専門の演劇の事等を、一通り話した後、「よしつ後の事は心配しなくてもいい。」と一言。私は、将来、仏文学で食おうとは、思つてないんですよ、と告げると、「今のうちは、視野を大きくもった方が良い。行つてから、どう考え方が変わるか、わからんじやないか。」真摯で、誠実なる先生の助言が、今も心に残っています。

「文学で何が出来るか」を真剣に考えておられ、出来る事ならば、自分も何か作品を書いてみたいのだ、と本音をチラリ。毎度の食事には、必ず洋風のものが一品は欲しい、と言われていた美食家。酒を愛し、文学を愛し、学生たちと心から楽しそうに語り合つておられた先生の御冥福を、心よりお祈り申し上げます。

あおき よしなお（仏文・81度生）

小説のなかの異境

— ロマン主義文学論序説 — その一

池田浩士

序論

一、虚構から現実へ

なぜ、われわれは虚構を求めるのだろうか？

日常の営みだけでも、この現実には、すでに充分わずらわしく重い。些事に追われ、時間にせかれて、なすべきことにも手をつけぬうちに、はや日が暮れる。過ぎてしまった時間と果たされなかった仕事とだけが積み重ねられていくようなこの生活のなかで、なぜ、そのうえさら

に虚構の世界まで背負いこもうとするのか？ なぜ、ひとつだけでも手にあまるこの現実のなかで、さらにもうひとつ、別の世界にまで足を踏み入れようとするのか？ しかも、そこは、この日常を何ひとつ富ませるわけでもない虚構の世界にすぎないというのに。

虚構を、もっぱら現実の側からだけ見るとき、それはまさしく虚構ではない。なるほど、現実から素材や舞台を借りていることもあるとはいえ、やはり、現実とは無縁の、現実とは別の世界なのである。かつてのペテルブルクであるレニングラートに、たとえラスコーリニコフが下宿していた建物があり、そこから七五〇歩のと

ころに金貸しの老婆アリヨーナ・イヴァーノヴナの住んでいた建物が残されているとしても——ロンドンにいまなお、ペーカー街二二一番地Bのシャーロック・ホームズの部屋がれつきとして存在しており、かれの愛用した帽子やパイプがホームズ・ルックとしていまなお売られているとしても——しかしそれでも、ラスコーリニコフやホームズ探偵が現実の世界の人間でないことは、だれもが知っている。清が越後の笹飴を笹ぐるみ食っている夢を坊っちゃんが見るとき、夢のなかで笹飴を食べる清も、そして夢を見る坊っちゃんも、現実には生きる人間ではない。越後に笹飴という名物があり、赴任した坊っちゃん「野蛮なところだ」と感じた四国の漁村がたとえ現実には存在しているとしても、ホームズやラスコーリニコフが歩いた道がたとえロンドンやレニングラートに実在しているとしても、これらの人物たちが虚構の世界に生きていることに変わりはない。モデルや原型は、なるほど、現実の世界のなかにあつたかもしれない。だが、人物たちは、かれらの生活空間や体験もろとも、虚構の域を出ることがない。

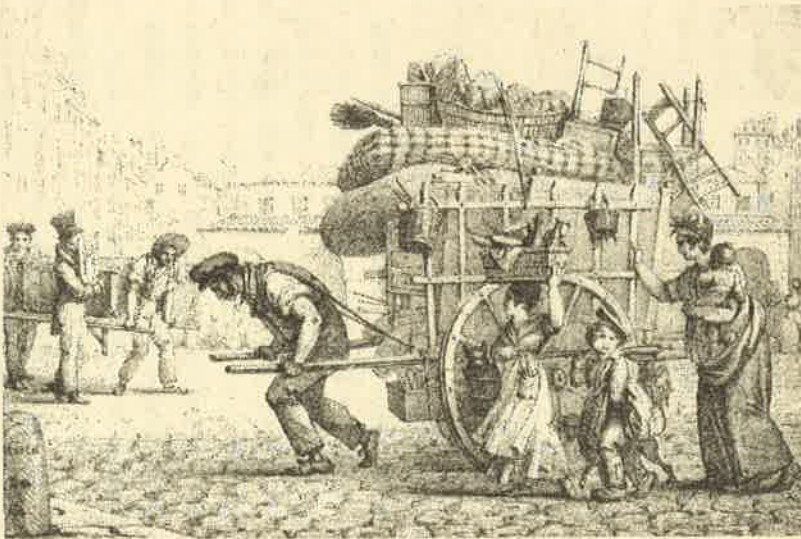
現実の側からもつばら見るとき、虚構はあくまでも虚構である。娯楽として、あるいは逃避として、あるいはまた代償行為として、われわれは、虚構が虚構であるこ

とを暗黙の前提にしたまま、虚構の世界を鑑賞し見物し享受することができる。現実の人間や現実の状況に似た人物や場面を、そこに見出すことはあるだろう。しかしだからといって、その人物それ自身、その場面それ自体が、虚構であることをやめるわけではない。「事實は小説よりも奇なり」という言葉は、「小説は事實より奇なり」と言いかえたときとまったく同じように、依然として、事實と小説、現実と虚構との境界を、根本的に異なる二つの世界の境界として、現実の側から確認しているにすぎないのだ。現実が現実であり、虚構が虚構であるかぎり、虚構に向けられた視線は、虚構を現実の似姿としか見ない。その視線は、現実の強固さに立脚点をもっているのである。

だが、現実のなかに生きつつ虚構の世界を求めるとき、もうひとつ別の視線がありうるだろう。「古代人たちの作品の多くが、断片と化してしまった。近代人の作品の多くは、成立と同時に断片である。」——フリードリヒ・シュレーゲルのこの言葉は、作品そのものの断片性を語っているよりは、むしろ、作品をどのように断片たらしめる現実のありかたを示唆している。強固な立脚点に身をおいて虚構に向かう視線ではなく、逆に虚構の側から現実に向けて発せられる視線が、ここで活動を開始する。

虚構の世界は、現実世界の似姿にすぎないものではもはやない。モデルや原型を現実世界のなかに見出しうるようなものではない。虚構は、現実よりも現実的な、もうひとつの現実なのだ。現実世界は、虚構によってかえってみずからの非現実性を、現実性の欠如を、あばかれる。現にある現実だけが、ありうる唯一の現実ではないことを、虚構はあらわにしてみせるのだ。

それだけでもすでに過重な日常の生活のなかにありながら虚構の世界とかわるとき、われわれは、こうしたふたつの視線を、未分化なまま自分のものとしているのかもしれない。虚構であることを知ったうえで現実を離れてつかのまの非現実に遊泳するわざと、われとわが身をとらえる現実を虚構の光にあてて空無化し超脱するわざとを、われわれは、虚構と現実とのあいだの往復のなかで、無意識のままにせよ、駆使しつづけているのかもしれない。虚構のなかへとつかのまの遊泳に旅立つわざが、帰りゆく現実の強固さを前提とし、現実をさらに強固なものとする養分の補給として働くとすれば、虚構の光にあてて現実を空無化し超脱するわざは、もはや帰りゆく現実そのものを前提とはせず、まったく別の現実を探し求める果てしない道を、たどりつづけることになるだろう。そして、その道の終わりは、虚構がついに現実



性をもたなくなるほどまでに現実そのものが現実性を獲得したときでしか、ありえないだろう。

二、遠いものの接近——「黄金の壺」

現実の世界よりもさらに現実的な現実を求める視線、いまある現実だけがありうる唯一の現実ではないという想いは、文学の諸作品のなかで、しばしば遠いものへの憧憬という姿をとって表現されてきた。

遠いものとは、ときには地理上の遠さであり、ときには時間的な遠さであり、ときにはまた心理的・生理的な遠さでもあった。イギリスにおけるロマン派文学の嚆矢のひとつとされる『オシアン作品集』（一七六五）は、じつは当時から十五世紀も昔の古代ケルト族の詩人オシアンのものではなく、訳者と称した十八世紀のジェイムズ・マクファーソンの贋作だったが、この贋作が巨大な反響を呼んでヨーロッパ各地の文学や文化に深い影響を及ぼしたのは、遠い歴史上の過去への共通の関心が、同時代人の心びとのところをとらえはじめていたからにはかならなかつた。「オシアン作品集」の洗礼を受けて育ったイギリスのロマン主義文学のなかで、古代ギリシアや北欧の古代・中世にテーマをとったものが少なくないのは、フランスやドイツのロマン派と変わらない。同じロマン

派の文学に、インドやタヒチをふくむ東洋への関心がくりかえし描かれ、みずから南米やアジアへの研究旅行に参加した作家たちまであったことは、歴史上の過去という時間上の彼方とともに、地理的な彼方が大きなインパクトをもちつつあったことを、物語っている。

遠いものへの関心ないし憧憬は、とりわけドイツ・ロマン派のなかで、時代的な遠さや地理上の遠さに加えてさらに、夢や幻想や怪奇譚というかたちで表現される。

夢や幻想や怪奇譚こそは、日常的な現実とは別のもうひとつの現実を、正面から既存の現実に対置する表現にほかならない。じつは単に心理的あるいは生理的に、しかも多くはほんの一時的に、日常的現実とのあいだに距離をつくりだすにすぎないにもかかわらず、夢や幻想や怪異体験は、それ自体がまったく日常的現実とは次元を異にする世界を創出するのである。遠いものは、こうして、いまある現実だけがありうる唯一の現実ではないこと、もつと別のいつそう現実的な現実がなければならぬことを、ドイツ・ロマン派の諸作品のなかで、はじめはつきりと宣言したのであった。

E・T・A・ホフマン（一七七六—一八二二）が、『カ
口風幻想作品集』（一八一四—一五）に収められた一篇、
『黄金の壺』（一八一四）を、一八一九年の再版にさいして



「新時代のメールヒエン」と名付けたとき、遠いものは、ここでもまたドイツ・ロマン派独自のふさわしい呼び名を与えられたのだった。なぜなら、メールヒエン（お伽噺）こそは、夢と幻想と怪奇譚とを、時間上の彼方と地理上の彼方を、もつとも本質的な構成要素とするものだからだ。

『黄金の壺』は、大学生アンゼルスがドレーステンの市中で、物売りの老婆の籠にぶつかって商品をぶちまけ、大騒動をひきおこす——というきわめて現実的、日常的な出来事から始まる。その騒ぎから脱け出した主人公が、エルベ河のほとりにぼつねんと坐って、自分の苦しい暮らしむきと、就職の見通しの暗さについて思い悩むところも、ごく現実的な場面として描かれている。ところが、頭に枝をひろげるニワトコの樹の葉かげから、奇妙なざわめきの音が聞こえてくるのに気づく。その音がいつしかささやきの声となっていくとき、主人公と読者は、現実に存在するエルベ河畔のドレーステンの町から、どこにも存在しないメールヒエンの世界へと引き入れられていく。

ニワトコの枝に、緑がかった黄金色の小さな蛇が三匹からまって、夕陽にむかつて鎌首をもたげているのに、

主人公は気づく。と、そのうちの一匹と目が合ったとき、かれは心の底までしみとおる衝撃を感じて、この蛇を激しく恋してしまふのである。

多くの民話や昔話にも、人間と動物、あるいは人間と妖精(水の精、雪女、等々)や空想上の生物(人魚など)との交情が語られている。そして、それらのほとんどにおいて、男性は人間であり、女性は人間外の存在のほうである。人間の男を愛してしまった人魚や水の精や狐や鶴は、かの女らの真摯な愛を人間の男に裏切られたすえ、ふたたびもとの姿にもどつて、さみしく人間外の世界へ帰つて行かねばならない。「黄金の壺」でも、やはり蛇は女性で、人間は男性である。だが、この物語では、アンゼルスは蛇のゼルペンティーナを裏切らない。かれの将来を囑望している教頭のパウルマンの娘で、十六歳になるヴェロニカが、将来きつと宮中顧問官くらいにはなるに違いないかれに想いをよせているが、かれは迷いながらも結局ゼルペンティーナを愛しつづける。民話や昔話が、依然として日常的現実のひとつの似姿であり比喩にすぎないとすれば、メールヒエンは、日常的現実のひとつの対極を、あるべきもうひとつの現実を、物語っているのだ。だから、昔話や民話では、どれほど多くの教訓や知恵がそこにちりばめられていようと、権力者た



る男は、征服者たる人間総体を代表して、被征服者たる人間外存在(原初的自然)の被抑圧者たる女を、裏切り、棄てるしかなく、物語は悲劇的に閉じられる。これにたいしてメールヒエンでは、まだ実現されていない人間相互の関係、まだ回復されていない人間と自然との関係が、いまこそ実現される現実として、すでに描かれ、物語はこうしてはじめて悲劇を克服する。

「……ロマン主義文学においては愛の精神が、眼に見えないにせよ見えないにせよ、至るところに漂っていないくはならない。〔……〕空想だけが、このような愛の謎を捉えたものが、あらゆる文学的描写の形式において、空想的なものの源泉なのです。」——フリードリヒ・シュレーゲルは、一七九九年に発表された「小説についての書簡」のなかで、こう述べている。「黄金の壺」より十五年早いこの文章のなかに、アンゼルスとゼルペンティーナの愛はメールヒエンによってしか成就されえないことを読みとるのは、さして困難ではない。だが、シュレーゲルは、このあとにつづけて、さらに重要な指摘をおこなっているのだ。「空想は力を尽して自己を表現しようとするのだが、神的なものは、自然の境界内では間接的にしかみずからを伝え、表現することができない。それゆ

え現象の、世界の内部では、本来空想であつたもの、うで、われわれが機智と呼んでいるもの、しか残らないのである。」(山本定祐訳。富山房百科文庫「ロマン派文学論」より)

この「小説についての書簡」は、ジャン・パウルの小説は虚弱な機智のごつた煮であつて小説といえるような代物ではない、という友人の意見にたいして、ジャン・パウルを擁護する趣旨で書かれている。ジャン・パウルについてはのちにくわしく論じなければならないが、とりあえずここで必要な点だけに触れるなら、かれは、ほとんどもつぱら小説の形式で、「現象世界」のさまざまな事象を描きつづけた作家だつた。かれの作品は、つかの間の夢が醒めて現実世界につきもどされる人物たちをもつぱら描いたがゆえに、メールヒエンの世界であれば愛のまつたき姿を描くことができたであろう空想が、せめて機智として現実世界に撃ちかかつていくさまを、徹頭徹尾、手ばなさないことしかできなかったのだ。そのジャン・パウルを「それでもやはり、非ロマン的なわれわれの時代のただ一つロマン的な現象なのだ、思いきつて主張したい」と評価するシュレーゲルは、「黄金の壺」も、そしてそもそもE・T・A・ホフマンという作家そのものもまだ生まれてはいなかつた時点で、すでに、ジ



ヤン・パウルの小説と『黄金の壺』とが、いづれも、いわば相補かいはりいあつて、ロマン主義的な虚構と現実とのかわりを体現していることを、期せずして予見していたのである。

『黄金の壺』は、機智を手ばなさなかつたジャン・パウルとは対照的に、夢と空想の領域に徹することで、現実にはまだ実現されるべくもないゼルペンティーナとアンゼルスとの愛を実現させることができた。だが、もちろん、この愛は平坦の道をたどつて実現されるわけではない。蛇のゼルペンティーナと教頭の娘ヴェロニカとのアンゼルスをめぐる確執は、じつは、火の精の一族と黒い竜の一族との長く壮絶な戦いのひとこまにすぎないことが、やがてゼルペンティーナの口から明らかにになる。アンゼルスを文書浄書のアルバイトに雇ってくれた文書管理役のリントホルストは、ゼルペンティーナの父親で、夢の国アトランティスに君臨する霊界の王に反抗して緑の蛇を愛してしまい、人間界へと追放された火の精だったのだ。ふたりの間に生まれる三人の娘、蛇の姿をしたこの娘たちのそれぞれが、人間の青年に愛されて結ばれたとき、一族は許されてアトランティスに帰ることがのできるのである。一方、ヴェロニカも、かの女に言い寄る書記のヘールブランドも、さらには物語の冒頭でア

ンゼルムスが筆をひっきりかえしたあの物売りの老婆も、じつは、火の精と敵対する黒い竜の羽根の生まれ変わりだった。

謎にみちた確執は、ヘールブランドが宮中顧問官となつてヴェロニカと結婚し、アンゼルムスがゼルペンティナと結ばれてアトランティスへ赴くところで終わる。ヴェロニカ夫妻は現実世界の幸福を手に入れ、アンゼルムスたちは「夢の国」の幸せを見出す。結びの一章は、もちろん、このアトランティスの日々をそれほどあざやかに描いてみせてくれるわけではない。しかし、アンゼルムスの物語を終えて、アトランティスに行つてしまつたかれの現在を幻覚によつて見る事ができた語り手の肩をたたきながら、リントホルストが最後に語る言葉は、この作品の根本理念をあまりにも明瞭に言いあらわしている。アンゼルムスのようにアトランティスに行くことができないのを嘆く語り手を、リントホルストはこうなぐさめるのだ――

「おちついて、おちついて、あなた！ そんなに嘆いてはいけません。――あなたもたつたいまアトランティスに行つておられたのではないですか。それにあなたもあそこに詩人の魂の所有地としてけっこうな農場をちゃんとおもちではないですか。――そもそもアンゼルムスの味



わっている至福の生活は、つまるところ詩のなかにある生命と通ずるものなのではないでしょうか。詩のなかでは、この世のあらゆる存在がきよらかな調和をとげ、それが自然の最も奥深い神秘となつて現われ出ているのですからね。」(神品芳夫記。岩波文庫版より)

あくまでも日常的現実と対決することを放棄して、夢のメールヒエンのなかへ逃避した——と批判することによつては、『黄金の壺』とそれに代表される一連のロマン主義文学作品の問題は、何ひとつ解消されるものではない。なぜなら、たとえヘルブランドとヴェロニカが踏みとどまる現実の生活を描きつづけたとしても、問題は解決しないからである。ヴェロニカとの、おそらくはつかのまの幸せに酔っているヘルブランドのその後こそは、ほかならぬジャン・パウルが、とりわけ『貧民弁護士ジーベンケースの結婚生活と死と婚礼』(一七九六—九七)をはじめとする諸作品で、決して虚弱とはいえない機智のごつた煮として、描きつづけねばならなかったテーマだった。このジャン・パウルの世界と、アンゼルムスの「夢の国」とを、少なくとも等価なものとしてとらえる視点こそは、ロマン主義文学と向かいあうときの、最少限の前提であるはずなのだ。「夢の国」の具体的な内実とされている「詩」のなかにあるのは、ヘルブランド



「ジャン・パウルのな世界とは無縁な別天地ではない。

詩、広くは芸術の領域こそ、ほかならぬ現実世界のなかで具体的に容認され許容され、促進さえされた数少ない自由の国だった。市民社会の現実のなかでの例外的な治外法権の場だった。魂と自由と夢とを売り渡すことと引きかえにしか許されない市民社会の構成員としての生活が、この治外法権的な数少ない場でのみ、たとえばいまなお表現の自由という理念として生きているような主体的創造性を、發揮することができたのだった。もちろんその自由は、市民社会からの脱落者、あるいは犯罪者となる危険と、つねに背中あわせだったにしても。

三、自由の領域——影を失くした男

ホフマンの『黄金の壺』が最初に発表されたのと同じ一九一四年、アーデルベルト・フォン・シャミツソーの小説、『ペーター・シュレミールの不思議な物語』が刊行された。「影を失くした男」として知られているこの主人公もまた、ホフマンのアンゼルムスと同じように、途方に暮れた青年として読者のまえに登場する。

「私」と名乗るかれは、長い船旅を終えてようやく目的の港に着き、生業の道を見出すために紹介状をたずさえてさる大金持を訪れる。おりからその大金持は、自宅に

客を招いて園遊会を催している最中で、主人公はなすすべもなくその場にとどまっていなければならぬ。ところが、客人たちの群れのうしろについて歩きながら富豪から声がかかるのを待っていたかれは、なんと不思議な光景を、それも一再ならず目撃してしまう。客たちにまじって、粗末な灰色の服を着た風采の上がらぬ初老の男がひとりいたのだが、なんとその男は、客たちが望む品物を、絆創膏であろうが望遠鏡であろうが、大きな絨緞であろうが三頭の駿馬であろうが、たちどころに灰色の服のポケットから取り出して用立てるのである。主人公は、気味が悪くなって、そつとその場から脱け出そうとする。と、そのとき、あとを追ってきた灰色の服の男に呼びとめられ、奇妙な取引が両者のあいだに成立することになる。

主人公、ペーター・シュレミールは、つまり、この灰色の服の男から、金貨が無尽蔵に湧き出る伝説的な「幸運の金袋」を受けとり、引きかえに自分の毒にも薬にもならぬ「影」を相手に与えたのだ。そしてもちろん、読者の予想通り、ここからペーターの苦難の道が始まる。なんの役にも立たないと思っていた影を持たないばかりに、かれは、どこへ行っても人びとからひどい仕打ちを受けなければならぬ。金に糸目をつけぬやりかたで、



辛うじて人間社会の片隅に隠れ住むよりほかに、生きる道はなくなる。ようやく、忠実な下僕ベンデルを雇って、かれの庇護の下に旅から旅の暮らしをつづけ、なんとかしてあの灰色の服の男を見つけ出し、影を買いもどそうとするが、無益な骨折りに終わる。最初の恋も、そのあとのもつと深い恋愛も、影がないことが露見して破綻を迎える。性の悪いもうひとりの下僕に秘密を知られ、ゆすられたばかりか、最初の恋人をその男に奪われさえする。こうしてついに、絶望のあまりペーターは、変わらぬ誠実さで接しつづけてくれたベンデルにも暇をやつて、ただひとり、灰色の服の男をさがす旅をつづける。

ペーター・シュレミールのこの物語は、これまでしばしば、作者シャミツソーの運命を重ねあわせて解釈されてきた。一七八一年、フランスの著名な貴族の家庭に生まれたシャミツソーは、この生年からすぐ思いあたるように、八歳のときフランス大革命に遭遇する。生家の爵位は革命政府によって剝奪され、先祖伝来の領地をあとに、一家はベルギーやオランダを経てプロイセンの首都ベルリンに流れつく。ドイツの地での困難な生活ののち、一八〇二年にいたって一家はフランス帰国を許されたが、ドイツ語を学んですでにプロイセン将校となっていたアーダルベルトだけは、家族と離れてドイツにとどまる道



を選ぶ。対ナポレオン戦争にプロイセン軍人として参加したのをきっかけに、一時フランスに帰ったが、安住を得ぬままスイスを経て数年後ふたたびドイツにもどり、一八三八年の死まで、ドイツ人として生きることになる。ペーター・シュレミールの運命と作者シャミツソの生涯とを重ねあわせて見る解釈とは、つまり、祖国をもたないシャミツソのよるべなさがシュレミールの影の喪失という主題によって表現されているのだ——というものにほかならない。

たしかに、影の喪失という魅力的なモチーフは、祖国に限らず一般に帰属の場を失った人間の、孤独やよるべなさと無関係であろうはずはない。自己同一性の喪失アイデンティティという言葉でこれを言いあらわすことも、もちろんできるだろう。中世的な共同体社会の桎梏から解放されて近代的な個人として自立する道をたどりはじめたとき、その個人は、共同体という地盤が足下から消え去っているのに気づいたのである。産業革命とフランス革命は、近代的な個人の社会的前提条件となるはずだった。そもそも、近代産業の拡大によって都市が農村を蚕食する過程が始まらなければ、生まれた土地を離れて旅の生涯を送ったり、好きなどころに定住したりすることも、不可能だったろう。移住の自由が歴史上はじめて合法的権利と

して認められたのは、フランス革命によつてだったといふ。しかし、こうした自由は、帰属すべき場を失つた人間にとつては、よるべなさど自己喪失でしかなかつたのである。ペーター・シュレミールの旅は、あの灰色の服の男とようやく再会して、相手のさらに重大な交換条件を蹴つて最終的に決裂し、死ぬまで影をもつことができないことが決まるまでは、少なくともそのときまでは、移住の自由という理念とはまったく裏腹の、束縛された苦難の道程でしかなかつた。

『黄金の壺』が、「夢の国」というユートピアを描いたとすれば、それゆえ『ペーター・シュレミールの不思議な物語』は、自己喪失という逆ユートピアを描いたのである。だが、じつは、この解釈はまだ作品の半分についてのみ妥当するにすぎない。

影を失くした男の物語である『ペーター・シュレミール』は、ほとんどつねに、読者や評者の視線を、影の喪失というモチーフにのみ惹きつけてきた。けれども、影を失うというモチーフは、じつは、この作品の半分にすぎないのだ。——長い孤独な旅のすえ、ようやく灰色の服の男と出会うことができたペーターは、いまだでは悪魔であることが歴然としているこの男から、影を返却するかわりに死後の魂を自分によこすという念書に署名

せよ、と要求される。この要求をきつぱりと斥けたとき、ペーター・シュレミールは、一生涯ずつと影なしに生きるという運命を選択したのである。男と別れたかれは、失意のうちにさる小さな町へ出て、すっかり傷んでしまつた長靴を買いかえようとする。あの忌わしい金袋は悪魔と訣別するとき敢然と投げ棄ててしまつていたので、高価な新品にはとても手がとどくものではない。安い古靴を買いとつてそれにはきかえ、行くあてもない旅をまた続けようとする。

そのとき、かれは、なんとも奇妙なことに気づく。ほんの数歩しか歩いていないのに、あたりの光景がたちまち目まぐるしく変化するのだ。ようやく、それが、伝説で有名な「七哩靴」、一步で七哩を行くことができるという靴であることを、かれは悟る。こうして、突然、かれのまえに未来が開ける。人間の社会から排斥され、悪魔との再会を求めて山野をさまよつているうちに、かれは、自然の生態に接して、それに深くこころを惹かれるようになっていたのである。七哩靴は、この地球上を広く駆けめぐつて自然研究を本格的に続けるのに、うつつけのものだった。ペーター・シュレミールは、長い苦しみと模索のすえ、ついに、自然研究者として、生きる道を見出すことができたのだ。しかも、この道は、かれひと

りの充足に終わったのではない。かれの研究成果は、自然体系学や植物地理学や植物生成史などの分野にたいする画期的な寄与として、社会に役立てられるはずなのである。

作者シャミツソーが、こうした救いにどれほど重きをおいていたかは、主人公がほかならぬその自然研究の最中に起きた小さな事故を直接のきっかけにして、かれが愛した愛されたたつたふたりの同胞である男女と再会を果たす、という結末によつても、明らかだろう。影を失つた男の物語は、影を失つたことを補つてもなお余りあるひとつの救いとして自然科学の研究をかれに課すことで、悲劇的結末を回避するのだ。

この結末は、シャミツソーにとつて、ひいてはまた當時のドイツ・ロマン派の表現者たちにとつて、自然科学という分野がどれほど積極的な意味をもっていたかを、如実に物語っている。「この世のあらゆる存在がきよらかな調和をとげ、それが自然の最も奥深い神秘となつて現われ出ている」という状態、ホフマンがリントホルストに詩の領域の本質として語らせたこの状態が、シュレミールの物語では、自然科学研究によつて開示されるのだ。自然科学とは、人間と自然との、したがつて、ひいてはまた人間と人間との、さらには人間と自己自身との、あ

るべき関係、いまはまだ実現されぬまま秘められているその関係を、明らかにし実現していくものだったのである。その自然科学の領域が、このような方向での成果よりはむしろ逆に自然のさらなる収奪へと、自然破壊と人間の反自然化へと、その後の二世紀のあいだひたすら向かいつづけていくことになるのを予見しえなかつたのは、もちろん、シャミツソーの責任ではない。ドイツ・ロマン派の表現者たちにとつて自然科学とは、まだ、ノヴァーリスが詩人と等しい地位を与えた鉱山師のように、自然の秘められた声に耳かたむける作業としか、映つていなかった。産業革命がドイツにも押しよせ、自然科学がもはや自然収奪と自然破壊とから無縁でいることが不可能であるのを、文学の表現者もまた直視せざるをえなくなるには、シュレミールの時代からなお数十年を経なければならなかつた。

影を失くした男が最後に発見する自然は、それよりはむしろ、アンゼルムスが行きつく「夢の国」との関係で注目されるべきだろう。詩、つまり芸術と文学の表現がそうだったように、科学は、その成立の当初から、現実のなかのユートピアとして、日常生活のなかでは許容されない自由の領域のひとつだったのである。これまた詩の領域と同じように、余計者と狂気との囲いのなかへ追

放される危険と背中あわせになつて、科学は、市民社会の一種の治外法権を享受してきた。現実の日常生活のなかでは実現されるべくもない別の現実、現実よりもさらに現実的な虚構の世界——それが、自由と真理と主体性とを不可欠の契機とすると考えられている科学と芸術のなかに、生きてきたのである。

ロマン主義の文学表現と向かいあうということは、それゆえなによりも、現実のなかのこのふたつの虚構世界が、現実のなかのもつとも自由な、もつとも主体的な、もつとも真実と深くかわる領域だったという問題を、根底から引き上げることでもあるだろう。(つづく)

(いけだ ひろし・京都大学教員)

— 連 載 —

聞き書き—部落に生きる人たち⑨

部落青年としての自覚を

話し手 安井 義隆 さん
1949(昭和24)年3月26日生

聞き手 田宮 武

青年が先頭に立って行政交渉を持った

——以前にきた時に安井さんから青年部活動ということ
で、最初部落の青年が一遍集まってみようやないか
と、関宮町で集まってソフトボールかボーリングを
やったとかいう話は聞きました。その後、青年部が
結成されて、いろんな糾弾闘争をうっていく、その
辺まで話を聞いたように覚えています。で、大谷町
の木村民子の差別発言事件とか、山田久の差別文書
事件も聞いたかな。それから但馬プロイラーの就職
差別事件も聞いたかな。そういう形で、各地で連日
のように確認・糾弾会を持ったという話を聞きまし
たけど。

安井 そういう糾弾闘争を各地にうちだしたのは山田
(久差別文書事件)以後ですね。(昭和)四十九年一月に山
田(事件)が起きて……。四十八年の十月に、青年部が結
成されていたんです。

——その青年部は南民協(南但民主化協議会)の一部なん
ですか。

安井 その十月まではね、南民協の青年部だったんです。
それ以前に、親組織の方が(部落解放)同盟に入るんです
が。四十八年の五月に同盟の県連ができるし、七月に

南但の支連協(南但地区支部連絡協議会)ができたんです。それまでは、結局南民協の青年部として、丸尾(良昭)さんやばくぐらいが関係しとった。その当時は、青年団活動とかサークル的な青年の集まり、集団があつたのですね。そういうなかでのリーダー的な人が出てきて活動しよった。

——南民協の一つとして青年部ができてから、それが支部の青年部に変わっていくのに何年ぐらいかかりましたか。

安井　どっこの支部もやっぱり四十九年ですわ。どっこの青年部も四十九年に結成されとるんです。それまでは、四十八年七月に親組織ができてとるのね。これはまあ闘う支部ではなかつたけど。要するに、区長さんが支部長をやつとるような状態だつた。そのなかで青年もいっしょに支部員として活動してました。

——差別事象にたいして糾弾闘争をうって、やつていかんとあかんのやという考え方は、南但の青年もほかの人たちも、いつごろ、どういうきつかけで分かるんやろうか。南民協の考え方にはあんまり糾弾の考え方がないわね。

安井　そうです。それまでにリーダー研修いうて、林田幸之助さんを中心に、部落解放運動の歴史とか、これか

らの青年はやつぱしこういう具合にしていかなあかんとか、そういう話をぼくらずつと聞きよつたわけです。四十八年ごろですね。各地域に寄り集まつてね、青年はこれからなにをしていくんだということを中心に、教育委員会の社会教育の先生を(講師に)呼んだりしてね。そういう講義を受けて、学習は徐々にすすめて行きよつたです。内容はやつぱし部落解放運動をどういう具合にすすめていくかということだね。で、糾弾をうっていくという点では……十月に青年部が結成されるわけなんですわ。

その時に、結成大会には総勢で百数十人の人が集まつてきたわけなんですけど、特に和田山町の青年の結集が悪かつたんですね。で、まあ、なんでやろう、あんなに呼びかけて行つたのにと。青年が三隊にわかれて各部落へオルグに入つて行つたわけですわ、結成大会に結集せえということ。でも、まあ、和田山町が一番悪いいうんで、その青年部の結成以後、一回和田山町の行政と話し合いをしてみようかと、部落問題について……。特に部落の青年らがおかれている状況について聞く必要があるんと違つかということ、南但地協の青年部としては一番最初に和田山町と行政交渉をやるわけです。それが十二月だったのかな。

——その時は糾弾ではなくて、話し合いということですか

わなあ。

安井 糾弾じゃないですね。そやけど、結局、糾弾みたいになつていくんです。それをやってみて、行政があまりにも片手間に同和行政を押し進めとるということがそのなかから暴露されてくるわけです。同対審査申、それから特措法の内容についての話聞きよつたら、したつとるんだという考え方でね、同和行政をすすめてきとつたいうことが明らかになりましたね。そんなことで、おそらく部落の人らは立ち上がることはできんやろう、(行政に)してもらつとるという考え方は……。行政がモノを与えて、黙らかしていく、部落の人をね。それではやつぱし運動自体がそのなかからまき起こらんし、まして青年なんかでは一つの組織を作つて、運動でもしていこうやないかという意欲的な考え方も生まれてこんだろうと。それを契機に、和田山町がこんなんやつたらと、各町にずつと入つていくわけです。二番目に山東町やつたらと違うかな。

——安井吉成さんが山東町の話をしてたな。町長の態度がどうか……。

安井 和田山町の公民館でやつたのが、青年部としては初回ですわ。それ以後、(どこそこの)別の教育集会所ですね、やつたんです。山東町は(どこそこの)部落のお寺の

中でやりましたわ。

——山東町の行政と話し合いを持った理由は……あそこは三つの地区(部落)があるけど、青年部が会合を開いても部落の青年が誰も出席しなかつたとかで、それで町の姿勢がなつとらへんと話し合いを持った。最初、町長は居直つて、なんやかや言うつたけど、最後には「分かつた」というか、「悪かつた」と言うたとか……。

安井 いえいえ、(町長は)途中で退席するんですわ。(どこそこの)部落ではないんだけど、別の部落に融和主義者がおつてね。山東町の支部のなかをまとめとつたような人なんですけど、その人が出て来とつて、結局、町長が「こんな会やつたら、帰らせてもらう」と退席してしまうわけです。それに輪をかけたように、「今日の会はわしが責任持つて始末するから……」言うてね。という事は、町長に帰つてええいうことを言うてしまうわけです。それで、その晩は(町長が)帰つてしもうて話にならんのですけど、あくる日にすぐに山東町の行政との交渉を庁舎前へ行つてやりましたわ。

——最初の晩は交渉をお寺で持つて、その時町長は何分ぐらいおつてもう帰りましたのか。

安井 すぐやつたか、一時間ぐらいのもんですわ。

——「言葉づかいが悪い」とか「荒い」とかいうことだったのかな。

安井 ええ。さっきの融和主義者の人が「町長や役場の人になりたいして、そんな普段の言葉づかいしとつたら、あかんツ」言うてね。なんかこう、偉い人にものを言うのに、敬語を使わなあかんいうような意識が多分にあつたね。これは山東町だけじゃなしに、ぼくらの村のなかにもあつたしね。対町交渉なんかあつた時にも、やっぱし「われ」とか出てしまうんでね。そんなことをばを聞いてとつて、「あんなこと言うたら、あかんわいな」と。次の日に、青年が山東町の庁舎前で抗議集会を持つてね。まあ、行政も「応じる」ということで、中央公民館かで前の晩流れた対町交渉をやりぬきました。そういう対町交渉、行政交渉が主であつたんやけど、そういうなかから、あのう、確認、糾弾の戦術をみな各自学んできた。行政にたいする追及の仕方とか……。

山田久に差別行政の姿を見た

——そうすると、はつきりと確認会とか糾弾会という形で、南但地協や青年部が最初に差別事象を取りあげて持ったというのは、いつごろで、なにやったんやうな。

安井 やっぱり山田久以後やね。その整理というのは、青年部としてはキチツと山田久の差別文章を部落差別事件としてね、整理はできなかつたわけですけど。それを、やっぱし丸尾さんあたりが中心になって、林田さんの助言もあつたんでしようけど、その当時、三つの命題と言とりましたわね。特に、いままでの同和行政のあり方、施策にたいして対町交渉しながら追及してきとつたんやけど、山田久事件、山田久の差別文書事件というのは、いままでもやつてきた行政のなかにカチツと当てはまっていぐわけですね。たとえば、山田久が言うとするように、「県の偉いさんらも、同和、同和と言うとるけど、真剣にやつとるもんがおれへんのや」とかね。そのくせ、片一方の方では「とにかく(部落は)おそろしい集団なんやでえ」と。行政がやっぱし建前と本音を使いわけしとるということを、山田の差別文書によって見抜くことになつたね。で、(青年)行動隊が組織されたのが、やっぱり山田久差別文書事件糾弾闘争本部が設置されてね。本部長に山本佐造さん(関宮町)がなつて、闘争委員長に丸尾さんがなつて、その下の闘争委員には各支部長がなつてね。南但青年部は別枠でしたけど、行動隊として活動してもらうという決定でした。

当時、一番ぼくらのエネルギーになつたのは、一般地

区の子がね、七人ほどおったんやね。朝来町に八鹿高校の分校があつてね、朝来分校というのがあつてね。そこで、朝来町の(どこそこの)部落の大垣さんという子が中心になつて解放研のサークル活動をやつとつたわけですけど、分校に行つとつた朝来町内の一般地区の子が南但の青年部に入つてきてね、ともにずつと行動しましたわ。四十八年もそうだし、四十九年もそうでしたわ。それで、だいぶ助かりましたね。

やつぱし青年部が結成されて組織化されていくわけなんやけど、各支部でほんなら主体的に青年部活動ができとるかいうたら、カッチリと確立してなかつたですからね。行動なんかも、一班か二班に分かれて、山田の差別文書を各支部へ持つて行つて、支部長を通じて、「何月何日に青年行動隊が学習会に行くから、支部が受け入れてくれ」言うて、本部長通達を出してね。支部長は闘争委員に入つとるから、そうして各支部へ青年部が入つて行つてね。山田の差別性とか、今やつとる行政の同和対策事業なんかでも、やつぱししてもらつてんではない、運動によつてさせとるんやと意識変革をきり変えていく学習をしていきましたわ。これはずつとどの支部にも入つて行きました。そういうなかで、青年もポツポツ会議にも出て来るようになりましてね。当時で、青年行動隊

は二十人ほどやつたかね、二十人いなかったかね。一般地区の子どもも含めて、そんなもんやね。

——四十八年十月に青年部を結成した時には、メンバーは何人ぐらいでしたか。結成集会には百五十人ほど集まつたということやけど。

安井 青年行動隊は三隊ぐらいに分かれて行動しよつたから、十五、六人ぐらいかな。

——生野町の(どこそこの)部落と、朝来町の(どこそこの)部落と、養父町の(どこそこの)部落の青年と、それから……。

安井 八鹿町の(どこそこの)部落と、養父町のもうひとつの部落の青年もおつたしね。

——その山田久差別文書糾弾闘争がまあ最初の糾弾闘争になるのかなあ。

安井 そうですね、南但では一番最初に、組織的に、それも大衆的にやつた確認、糾弾会ですね。

——その山田久差別文書事件を各支部へ持つて行つて、オルグした時の反応はどうでしたか。

安井 まあ、糾弾いうたらどんなもんか、要するに弓の絵を書いてね。結局、こういう弓の曲がつとる部分を書いてね。「これは差別意識によつて、人間の偏見によつて歪められとる。弓の糸を切つたら、これが元に戻るでし



よう。糾弾いうたら、やっぱし差別の心をやね、追及して行って、差別心を無くしていくんや」言うて、ごく単純な話でね。大きな模造紙に絵を書いてね、部落の人らのおる前で説明しましたね。糾弾いうたら、こういうもんとか、それから差別者の差別意識を変革させて行こうと思つたら、やっぱりいままでの部落の実態の話とか、差別者にたいする怒りの声が出るのは当然やと。これは、実際(差別者)本人だけの問題じゃなしに、こういう社会を現在も助長させとる行政にも責任があるということまで説明しました。いままでもやつたら、あいつが差別した、やつたれという考え方やつたけど、「この人だけが悪いんやない。そういう社会を作つとる行政なり、まだまだ同和対策事業をすすめていかんならんに放置しとる行政が悪いんや」ということで、行政の責任に転嫁させていくように仕向けていったんです。

そういう話をしていく中で、各支部が町にたいして「あそこ良うせんかい。こつち良うせんかい」ということで、対町交渉を持ち出した。まあ、改善要求を持ち出したんです。だから、山田(差別事件)の行動隊として入つて行って、そういう学習を部落大衆といっしょにするなかで、行動隊なんかも連日やつたね。今から思つたら、ようあんなことしたと思うんやけど。各支部で対町交渉

をやりだした。部落の支部長さんが役場に行つてね、何月何日に対町交渉を持つからという通知を行政に出したけど、行動隊にも「来てくれ」と言うてね。要請する支部もあつたんですけど、「行動隊を呼んだら、口が荒い」とか「汚い言葉を使う」とか言つて、入れさせん支部もありましたな。

——各支部の対町交渉というのは、支部の中の実態を把握して、それにもとづいて要求していったんですか。そうじゃなしに、「あそこもおかしい、こども直せ」というような思い思いのことだったんですか。

安井 結局、昔のね、「わしらはこういう具合に差別されてきたんだ」「こういう風に差別されたんだ」という話がモロモロ出てくるわけなんです、その交渉の中でね。「おまえら、なにもしてくれてえへんやないか。わしら、若い時にこういう風に差別受けてきた。それから、この前こんな差別を受けた。行政としてどないしてくれるんやあ」というような諸々の話がダァツと出てくるわけです。あつちから出、こつちから出、してね。部落のおつちやんやおばちゃんから出てね。それをうまいことまとめ、「そうやろう」ということで、山田の話をusstしていったね。整理はそういう風につけた。

——整理というと、さつき言つてたように、差別する個

人はもちろん問題やろうけれども、差別意識を残している現実をどう変えるかということで、行政の責任があるんやと……。

安井 そうです。だから、三つの命題あたりを武器にしてね。部落差別の本質とか、存在意義とか、差別観念とか、それを武器にしてね。むずかしいこと言つたつて分からんからね、基礎的な学習がなかつたら……。それをひとつの追及の基本線にして、それに山田(差別事件)を入れていって、行政にたいする追及をしていったんです。——そうすると、対行政交渉というのには、部落の人が

かなり集まりましたのか。

安井 かなり集まりました、各支部とも。区長さんの命令なのか、支部長命令でやりましたからね。まして、役場の人らが来るんやつたら、部落の人らが行つてやらなあかん。

——その辺が各支部で行政と持った最初の交渉ということになるんですか。つまり、支部長さんがおれに委しといたら、やつたるといふんじゃなくて、おつちやん、おばちゃんが出てきて、みんな出てきて、自分の差別体験をしやべつて、行政の責任を追及していくということになったのは、何月ごろからですか。

安井 そうですね、山田以後ですね。山田以後、そうい

う学習をすすめていきながら……支部に入って行って田の差別性を学習していきながら、(昭和四十九年の)三月だったかなあ、三月の二日か三日かに総決起集会和田山町の農研センターで持ったわけです。山田久差別文書事件の南但地協の総決起集会……糾弾して行こうと。

それまで糾弾いうたらどういふことか分からしまへんですから、二カ月ほどの期間がかかっていたと思うですよ。そのう、糾弾闘争をうって行こうという体制を作るのに……。

ハチマキ、ゼッケンをつけた部落大衆が集まった

——それまでに各支部へずうつと入っているわけやね。

安井 そうです。

——その総決起集会までには、各支部で対行政交渉はやられとつたわけですか。

安井 青年行動隊が入って、対町交渉を持つとつたわけです。で、まあ、「運動していかなあかん」いう人らもボツボツ出てきた。で、山田久の総決起集会を持つてね。闘争方針を決めたり、ピラを発行したり、南但地協としてこういう風に糾弾闘争をするという集会宣言を作ったりして、三月三日か二日にやりました。三月三十一日に豊岡市で第一回の確認会を持ちました。これは南但、北

但合同で……。あれは、山田久が豊岡病院に勤務しとつた関係で、北但も入って、南但、北但で確認会をやったわけです。

——農研センターでの総決起集会には、どれくらいの人が集まった？

安井 あれは会場がビッシリ入ったら、四百や五百(人)ぐらい入れそうだけど、その会場が一杯だったです。あのパイプ椅子並べて……四、五百は集まるとつたと思います。

——それは、部落の人だけやったんやろうか、行政関係の人も来ていたんやろうか。

安井 行政関係の人は出席してなかったね。部落大衆はつかし。

——ハチマキ、ゼッケンを初めて付けたというのは、いつだったかなあ。その時でなかつたんですか。

安井 その時に初めて付けた人がやつぱり多いんと違いますが。あのう、付けるいう機会がなかったからね、それまで……。

——西宮の闘争支援に行った時は、どうでしたか。

安井 その時は南但地協のゼッケンでした。南但地協のゼッケンが(四十八年)七月十五日に結成された時にできとりましたでね。ぼくらがゼッケン付けたというのは、南

但地協の結成大会の時に、青年が五、六人受付で付けたのかなあ。それが南但では一番最初にゼッケンを付けた時でしたね。それ以後の西宮や青年部の結成大会の時も、南但地協のゼッケンでした。山田久で、行動隊のゼッケン……南但地協青年行動隊のゼッケンを付けました。

——そのゼッケンには、どんなスローガンを書いてました？

安井 前と後に、狭山と同対審答申ですね。狭山差別裁判取消し要求とかね。後(背中)に同対審答申完全実施と、特措法の即時具体化と。ほかの府県と同じようなスローガンでしたね。一番下に、そのう、南但地協青年行動隊と。腕章とかハチマキには、山田久差別文書事件糾弾とか青年行動隊いうのを作りましたね。車につける四角の布の小旗も作っただね。

——その総決起集会とか各支部での対町交渉とか第一回の山田久の確認会での、部落の人たちの動きとか、反応とかはどうでしたか。かなりたくさん集まったとは聞きましたけど、それ以外ではどうでしたか。

安井 やっぱり部落大衆は青年行動隊(青年行動隊)が入ってきて学習をやつて、行政にたいして対町交渉をやつてね。行政の対応の仕方がなつたらなんだと感じとつたですね。ひとつは、やっぱし「同一集団である」とか「就職でき

にくい」とかね、「性病が多い」とか「犯罪者が多い」とかね、部落を悪の温床として見てきとる山田久自身にたいしてもそうやけど、それが県の幹部職員であるという、山田久にたいする、こう、怒りいうですか、そういうものがやっぱり会場のなかでも強かつたね。そういう具合に、集会全体を企画はしていったんですけど、そういう怒りが感じられましたわな。みんな真剣に、整然と集会ができた。そのあと、(国鉄の)和田山の駅前でデモンストレーションやりましたわ。蛇行のデモンストレーションですわ。このままではおさまらん、集会だけではおさまらん、なんかやっぱし抗議行動をやらなあかんということ、和田山の駅前で……全員ではなかつたですけど、——総決起集会では、主催者の方で予定していた以外に、会場からも活発な発言ができましたか、それでもなかつたですか。

安井 そうやね、質疑なり意見なりを求めるような集会ではなかつたですね。南但地協の方針を部落大衆に、下に降していく集会でしたからね。それまでに、闘争委員——各支部長さんらに集まってもらつて、方針をこういう風に決めてという会議を持つとりましたからね。まあ、大衆側からみたら、指導部まかせというやつ。

——それでも、説明を聞いていて、自分たちの体験にて

らしてみても、さつき言うていたように山田久にたいする怒りみたいなもんがかなり高まったというか……。

安井 山田個人にたいする……やっぱし「こんなこと書くやつは、どんなやつや」ちゆうことやね。にくたらしいというのが本音やろうねえ。あんなに好き(勝手)なこと書いたのやから……。それ以後三月三十日か三十一日に第一回の確認会を豊岡で持ちました。

——その前後に、いろんな差別発言や差別事象にたいする確認会が持たれるわけですか。それとも、山田久の総決起集会が終わったあとのことなんですか。

安井 そうですね。あのう、結局それまでは伏せよったわけですわな、差別事件なんかでも。数人で円く収めてしまう。それからとはいうと、差別言辞なり差別事象なりが発生した時には、すぐに摘発してきよったからね。支部長に言ったりとかして、情報は地協の方にも入ってきよりました。それを聞いて、支部長のところへ行つて事情を聞いてね、事実確認してね。それから、差別の確認会をするという通知を各行政に出してね。あと、差別者を出席させるとかは全部行政に任せた。こっちはもう通告だけです。

——差別した本人には通告だけ？

安井 いや、差別者には言いません、全然。もう、行政に責任持たせてね。「何月何日にこういう差別事件が発覚したから、この差別事象について事実確認会を開催する」と。行政がそれに対応して、差別者を出席させてね、事実確認会なんかは持ちよりました。

——差別者と話をして、確認会を持って、そこへ行政も出席するという形ではなかつたんやね。

安井 そうですね。青年部は支部長から事情を聞くぐらいやつたね。支部長というのは、その差別された当事者からいろいろ話を聞いとりますけどね。で、おかしい言いがかりみたいなことにならんように、カチツと整理さ



せといて……本人なり支部長に確認させといて、その話を青行隊が入って行って、支部長に聞きよった。実際、青行隊が入って行っても、支部が確認・糾弾をうてない状態もありまして、そういう場合は、青行隊が中心になって確認会なんか組織しよりました。

——そうすると、行政がわりと前面に出ていくことになつたんやろうか。差別した個人がいろんな部落の話や追及を受けて、受けとめるということになつたんやろうか。どないなつていたんやろうか。

安井 うーん、差別者にたいしても追及しよつたけど、確認会あたりでは……。やはり行政を突いていく方が主です。

——こういう差別事象が起こっていることの行政の責任を追及していく。

安井 ええ。

主体的に同和行政をすすめると追及した

——行政の態度いうんか、姿勢いうんか、考え方というんか、そういうのはどうだつたんやろうか。山東町の対町交渉の時には、「言葉づかいが悪いから、退席する」という町長の姿勢だつたし、それからはずきりとはでてこないけど、同じような考え方を持つて

いて、部落にたいする恩恵的な、いろんなことをしてやっている式の考え方が強かつたんやろうと思うんやけれども、それが確認会なんかに出席するとか、部落からいろいろと要求が出てくるということ、行政の姿勢、考え方はどんな形で変わったのか、変わらなかつたのかね。

安井 やつぱり行政は非を認めていったんと違うかな。

それから各支部の要求にたいしては応じていくようになつたからね、それ以後。実際、青行隊が恐れられたという側面もあるやろうけどね。部落のなかでも、かなりの批判がありましたよ。ただ「言葉が荒い」ということだけだね、青行隊を受け入れん支部なんかもありましたからね。それは、それなりに違う面でその支部に入つて行って、言葉がどういふところから生まれてきとるんかいいう話からしていきよりました。なんで部落特有の言葉があるんか、その言葉を使つて悪いんかとか……。「いままでみたいに同対事業なんかわしらしてもらつてるのと違う。これは行政の責任において、行政が自らしていかならんことや。するのが当然、行政がして当たり前じゃないか」とか。言葉づかいについては、「家庭のなかでできないな言葉使つとるかいうたら、そうじゃない。やつぱり部落は部落なりの言葉づかいで、職業がかなり影響しと

るんじゃないかとね。そらあ、ネクタイしめて、銀行員みたいなやつたら、日常的に敬語を使うからね。話し合いのなかでもあらゆる敬語が出るやろうけれど、部落のなかは見たら分かるように、大半が日雇い労務に従事しとるような部落大衆や。そういうなかで、まして部落のなかやつたら、親戚関係で身内が多いし、言葉なんか日常的に聞いとつたら分かるやろう。言葉にはやつぱし自分らの置かれとる生活のなかから出てきとるんと違うんかい。差別というのは、やつぱしわしらの生活のなかにあるんや」と、そういう話していきよつたら、うなずいてくれる大衆も出てきたわけです。「そうやなあ。言葉を選んで発言するより、やつぱり地下の言葉で言うたらええ」と。かなりその言葉の問題で苦しみましたわな、青年部は……。そやけど、最後まで俗にいう荒っぽい、汚い言葉を通してきましたわ。あらゆる確認会、学習会のなかでね。

——部落にたいする差別意識のなかには、絶えずあるわな。「言葉がほかの人の言葉と違っている」ということで、なんか閉鎖的なところがあるというのと、それから「言葉が荒っぽい」という式の考え方がありますわね。話は変わるけど、町長や行政の責任者の受けとめ方はどうやつたんやろうね。「もうかなわん

し、怖いし」ということで、本心はそうでもなかったのに、そういうところが先に出て、「言うなりにやつとつた方がええんや」というような形になったのかね。もうひとつは、「まともに受けとめて、やらんといかん」ということだったのかね。

安井　　そうやね、今から思っても、やつぱり真剣に確認・糾弾を受けて考えとつた町長というのは、今でもやつとりますでね。これだけ反動的な県の行政のなかでも、カッチリ基本は押さえとる。二町ぐらいかな。それから、当時は特措法なんかを武器にして、「みんな一様に自治体の責務になつとるんやないかと、これはひとつの法律やぞ。それやつたら、ちゃんと守つてやね、部落を解放するような施策を自らが自主的に、主体的に進めていかんなんと違うか」と。それが、もう唯一の武器でした、行政にたいして……。そのことにたいして、行政側として一切反論する余地がなかったんでしような。むしろ、ものを与えてきとるような行政施策をやつとつたしね。それから、同和行政をやらなんたら、また青行隊にやられる、同盟にやられるいう意識はあつたでしような。

——そうすると、行政では町長が対行政交渉を受けて、考え方を見直したところもあるし、それから「やつとつてんのや」という考え方が基本にありながら、



雪のなか「解放教育の確立を」と
たたかう生徒たち

(1975年1月18日)

それが変わらないままで、とにかくいろいろな要求が出てきたら、面倒やからその場しのぎにやっとなという形で応じた町もありましたのやな。

安井 そうです。多分にそういうところもありますね。その場逃れの町もあつたね。そういうなかで、部落民以外の、一般住民からも批判が出てくるしね。「同盟の言いなりになつとる」いうことで、糾弾闘争の経過について、南但八町の見解が出されとるビラがあるでしょう。八鹿高校糾弾闘争についてのそのビラなんか見たらね……。それは八鹿高校の事件後すぐに出された、十一月の三十日ごろやったかな。結局、(八鹿高校事件は)「暴力だ」

なんやかやいう一般地区からの追及が上がってきてね。

「町長としてどんな見解を持つとるんや」って追及されて、南但八町の町長見解として公式に出してくるわけですよ。

それは、過去の山田久差別文書事件以降の要求だとか確認・糾弾会を全部総括するような形で出てくるわけ？

安井 いや、そうじゃないです。八鹿高校についてののみです。

出身生徒が八鹿高校の同和教育を 真の解放教育にしてほしいと訴えた

——話のつなぎがちよつと悪くなるけど、八鹿高校差別教育糾弾闘争にいたる背景とか経過はどうやったんやろう？ 八鹿高校の同和教育の中味をどういうように評価していたのか、しゃべってもらえたら、いいけどね。八鹿高校が問題やと、地協や青年部が問題にしたきっかけはなんだつたのかとかね。

安井 やつぱり、N子さん(和田山町)の問題やろうね。山田久事件の……。

——それはどういうことやったんやろう？

安井 Nさんは八鹿高校の高校生だった。四十九年三月に卒業したんやけど、その前に山田久の息子さんと交

際しとつて、「付き合うのやめとけ」と言われて、山田久から差別を受けたわけですね。その以前に、四十八年の終わりごろに、和田山商高の糾弾をうちました。それはね、解放研活動……要するに部落の生徒らが中心になって解放研活動をやつとつたわけなんですけど、それをあざ笑うかのように教師が対応したということで、一遍和商が同和教育をどういう風に考えとるんやと、生徒らが追及し、告発していくなかで、青行隊がなかに入つて和商の確認会を組織していくわけなんですけど。

——それは、解放研の生徒が集まって何かしている時に、先生が部屋に入つてきて、「おまえら、真面目にやれよ」と言つたとか。

安井 そうです。皮肉をこめて言うてるわけですね。それじゃ、その先生が真剣に同和教育に取り組んでるんかと言うと、そうじゃない。何も考えとらん教師やがね、生徒を嘲笑したわけなんです。その時にもぼくは片山（正敏）の名前を聞いたわけです。それまでに林田さんとかからは、片山というのは日共の黨員やし、活動家やと聞いてりましたわ。日共との違いはどないむけ違うのか、ぼくらは当時知識もなかつたしね。かれらはかれらなりの正常化運という、日共の組織が別にあるのやということを知つとつたしね。和商の（確認会の）時に、教師は結

局出席してこなかつたんやけど、校長と教頭のみが和田山の日生ビルでやつた確認会にきましたね。その時に、片山が糾弾会場の近くをウロウロしとるといふことですね。

——その時に、ほかの先生が出席しないようにしとつた？

安井 あとで聞いてみたらね。片山は当時兵高組但馬支部八鹿分会の分会長かな、書記長かな。で、和商の教師を出席させないように策動やつとつたわけです。それは、あとから分かつた話なんですけど。それで、まあ、八鹿高校の片山つてやつは、結局、同盟にたいしてごつつい敵対してくるやつやな、反対しとるやつやな、とその時分からクローズアップされてくるわけです。「あいつは敵や」とね。そのうちに山田久の差別文書事件が起きて、さっきのN子さんも青行隊のメンバーでしたので、高校生やつたけど、ずっと青年といっしょに行動もしよりましたでね。やつぱし高校生の子が青行隊のなかにかなり入つとつたね。山田の事件が起きて、そのN子さんが八鹿高校の在校生で……。

——差別された子が在校生ということと八鹿高校糾弾とは、どういう具合に結びつけていったんやろうね。

安井 八鹿高校の同和教育というのは先進的やという評価があつたからね、当時から。片山あたりが真剣に取り組んどるといふ……あれだけの資料出しとるぐらいやか

ら、真面目にやっという事で……。真面目にやるその八鹿高校の教師集団が、マスコミのトップ記事に出されるような差別事件の被害者をかかえてね、なんらの教育的配慮もせなんだということが、やっぱし一番問題になりましたわな。それから、その事件後も、N子さんに八鹿高校の教師がどういふ対応を示してくるんかというところが注目されたしね、こつち側からは。なんらの指導もなされなんだ、結果的にはね。まあ、担任の小林重太郎（音読み）という教師が三日ほど家庭訪問をしたらしいですけど。それは裁判のなかでも明らかにされとるんやけど、山田久の差別事件をめぐって、八鹿高校のなかでやね：しかも「同和ホームルーム」いう特別の時間が設定されとったわけやけど、そういうなかで、先進的な同和教育の八鹿高校がなんらの教育もなされなんだいうこと自体が、やっぱり反片山、反八鹿高校の考え方を南但のなかに形成させてきたように思います。

——八鹿高校の教師集団というのは山田久差別文書についての検討とか一定の見解とかを出したんやろうか。
安井 出してない。出してない。

——出してないというのは、まさか文書自体を差別でないとして認定したんではないんやろうね。
安井 それはのちに今の裁判で明らかになつとるんやけど、

ど、要するに部落差別事件だと確認しとるわけですわ。しかし、そんなら教育の場においてね、取り上げて教育してもええもんか悪いもんかの判断はホヤかしとるんです。というのは、事実を教師自身が確認していない。ただ新聞に出されただけで、その記事のみによって、八鹿高校の同和教育のなかでこの事件を部落差別事件として取り扱うことは不適當やと逃げとるわけです。

——マスコミの報道する記事だけで判断しては「不適當や」と……。

安井 教育的に好ましくない言うてね。

——差別を受けた当の子ども、というか女子高校生に会って事情を聞いて……支部へ入って来て事情を聞くということはやっていないんですか。

安井 やつてないです。教師独自の調査はしてないんです。ただ担任の小林重太郎いう教師が家庭訪問して、まあ励ましとる程度です。励ましとるいうか、まあ事情も聞いてとるやろうけれどもね。そのことを学校に持って帰って教育するいう態勢はとつてない。それから職員会議のなかでも、この差別事件にたいして八鹿高校の教師集団として、どういう風に対応していくかという議論もなされてないしね。彼らがそう（裁判のなかで）言うとるからね。そういうなかで、卒業式のアピールになるわけ

です。N子さんと林田さん(二年生)がアピールしていくわけです。林田さんも青行隊のメンバーでしたからね。

まあ、部落研(部落問題研究会)の内容も聞かされたりましたし、林田さんも部落研におつて、「とてもあんなところにおれへん」という告発を聞かされたりしましたしね。

——二人のアピールの内容とは、どんなもんでしたの。書きあげた文章を読みあげたんやろうか、その場で言えて口頭で言ったんやろうか。

安井 口頭ですわ。結局、卒業式の全校生徒、父母が来とりますんで、その全職員の前でアピールしたんです。結局、「八鹿高校の同和教育は、真の部落解放につながってない。で、もつと真剣に同和教育を取り組んでほしい」とアピールをしてね。N子さんが発言したらいいですけど、林田さんといっしょにやったわけです。

——それは、もちろん式次第のなかに入っていないわね。式の始まる前ですか、あとですか。

安井 あとです。

——アピールを受けて、八鹿高校の先生の受け止め方はどうやったんやろうね。やっぱり無視なんですか。

真剣にとらえるべき事件だわね。

安井 そうです。あのう、常識的に考えたら、そうですね。かれらは法廷のなかで証言しとったことですけど、

「あれは、N子さんが本心で言うところのやない。結局、同盟に言わされとるんや」という話ですわな。「それが証拠に、N子さんのお母さんと、卒業式のアピール後に理科室かなんかで会って話したけど、とてもそんなアピールどころの話やなかった」と、かれらは言うつもりでしたけど。

しかし、それがたとえ建前にしろ、あんなけの卒業式のなかで発言がなされたいうこと自体がやっぱりね。そのこと自体についても、職員会議で議論したり、協議したりすることは一度もなかったと証言しとりましたわ。当時から、やっぱり部落解放同盟にたいする敵対いうもんを常に教師集団が持つとったわけですわ。だから、部落の子イコール解放同盟という意識をカチツと規定しとったわけですね。

——そうしたら、部落の子どもが言つとることはみんな(解放同盟に)踊らされとる、本心じゃないということかなあ。

安井 そうそう。すでに和商の時から規定しとったんやろうね。それが同盟じゃなしに、正常化連が南但に結成されとったらね、そこまで敵対してこなかったんやろうけれども。やっぱり片山あたりは養父町の(どこそこの)部落に入つて、いろいろと話し合いをしたりして、行政とは別の自力の運動団体を作らんとあかんと指導までし

とるからね。正常化連が組織されての部落の子弟やったら、もつとかわいがつとったんやろうけどもな。自分らと逆の組織が南但地区でできたということ、またその部落の子弟もまた一同盟員として青行隊のメンバーとして地域で活動しとる、それがこんど学校のなかに入ってきて動こうとしとるいうような意識もあつたんやろうね。

——八鹿高校の先生が入って来とつた部落の婦人が言うていたけど、非常に熱心にかんりの先生がどこで聞いたのかやつて来てね。話を聞いてはるだけやつたけど、ある時「そんなこつちやあかんのや。もつとしっかりやらんとあかんのや」ということで、みんなを励ますようにと言うか怒るように言うつたそうです。それが解放同盟の支部ができたあとは全然もう足を向けんようになったと言うてたね。わりと政治的な目的をもつてやつていたのやろうね。

安井 片山らが失敗したのは、やっぱり婦人を相手にしたことやろうね。やっぱり組織を作ろう思つたら、青年をオルグした方が良かったんや。(どこそこの)部落の婦人の場合には、地道な活動を続けとるけど、他所にその活動を広げていくようなエネルギーがなかったからね。ただ自分らが先生をかこんで話し合いしとつた。

——あそこの部落では婦人はしつかりがなばつた。

安井 しつかりがなばつた。青年みたいにな、向こうへ行つたり、こつちへ行つたり走り回つてやね、それを広げていくいう活動がなかったから、(片山らは)失敗したんや。

出身生徒が解放研設置をめざした

——ところで、卒業式のアピールのあと、八鹿高校の動きはどうなつていったんやろうね。

安井 三月のアピール後、四月に入つて林田さんらが八鹿高校のなかで具体的に行動を起こしてくるからね。四月には、今度新一年生が入ってくるしね。その新一年生というのが、もう当時、朝来中、養父中、広谷中と、各地域に中学校があるわけやけど、その子らは運動の高まりによつて部落問題にたいする関心をいや応なく地域のなかで、また家庭のなかで見つめてきとるわけですよ。まあ、しつかりした子やつたら、学校のなかで中学校の解放研を作つてね、そのリーダー的な活動をしとつた子もおるしね。そういう子が八鹿高校に入っていくわけですわ。どないしても部落の子どもが少ないなかでの行動には、どう言うんですか、圧力がかかつてきとつたんじゃないかと思えますけど、それを林田さんらが中心になつて、「部落研ではあかんから、解放研を作つていこう」ということで、徐々に活動していく。

委員編集評書 募集！！



「書評」を自分の手で 創ってみませんか？

☆雑誌の編集に興味のある方。

☆思想・文化運動をやってみたいと思う方。

☆お気軽に編集委員まで。

・連絡先 生協本館3F・組織部内

☎ 38719998 (直通)

☎ 38811121 (内線4821)

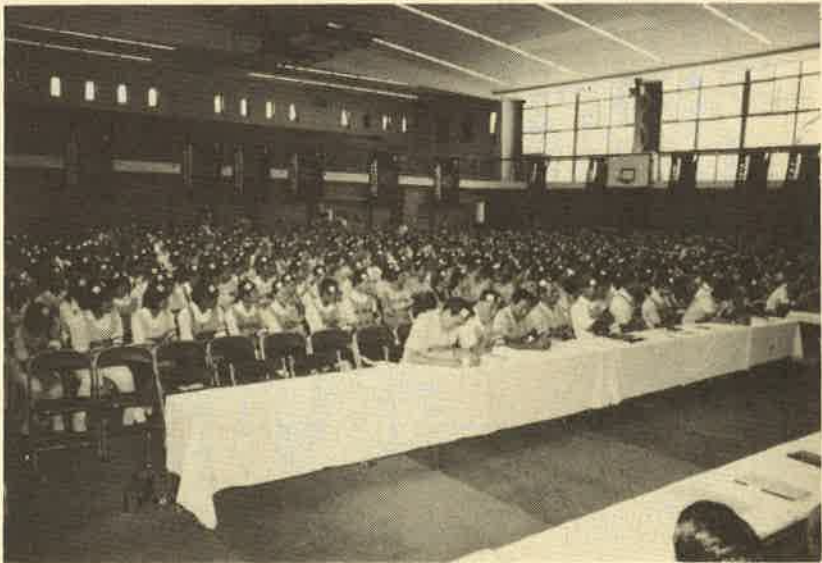
五月、六月やね、ずつと……いろいろな情報が入つとり
ましたけど、彼女らは八鹿高校のなかで解放研の結成を
めぐつてがんばつていくんです。和田山商高にしても、生
野高にしても、朝来分校にしても、解放研はなんなく認
められたからね。で、六月の一泊研修会があつて……。

——和商、朝来分校などの解放研設置が認められたのは、
四十九年四月から……それともそれ以前からのこと？
安井 そのころやね。四月ごろやと思いますわ。(解放)
奨学生大会というのが和田山の農研センターであつたか
らね。その時にはすでに解放研ができて、八鹿高校だけ
がなかつた。あそこには部落研があるから、部落研の生

徒が来とるんかというところ、そうじゃないね。部落の子
どもが部落出身生徒として奨学生大会に出席しとつたん
です。その時もかなり議論されたように思います。八鹿
高校の教師は来とつたように思いますわ。「なんで八鹿高
校だけ解放研がないんか」「なんで認めてくれんのや」い
う話が出りました。六月の一泊研修会を計画した時に
は、ほかの学校からはいろいろな妨害もあつたんやけど、
「丸公」で、要するに欠席にならんと、「丸公」で一泊研
修会にも出席させることになつたんやけど、八鹿高校だ
けは「参加するな」と、「教師も参加せんし、生徒も参加
するな」いう指示が出されとつたわけです。その指示も

片山あたりから……向こうは（指示が）組合から来たってんやろうね。兵高組、兵庫県高等学校教職員組合を使つて……そやねえ、もう組合として敵対してきとつたんやろうね。

——解放研が八鹿高校でつくられたのはいつでしたか。
安井 七月の末ですわ。これはもう校長の職権でね。だから四月以降やね、要するに解放研を作る段取りをして……。六月の時点では、「なんで解放研を認めてくれんのか」という話が（八鹿高校の）校長、教頭に出されていきまうから、五月には、もう作るという動きがあつたんですよ。ただ教師側が校則とか自治会の規則出してきて、「生徒会執行部が認めなあかん」とか「顧問がおらんんだら、サークル活動は認めん」言うてね。だから、裁判のなかでも教師らが言つとつたけど、「部落研があるから、解放研は認めなんだ」言うね。そのこと自体の誤りにも気づかんのかなあと思つて……。そらまあ、生徒を指導していくのは教師の責任でやっていかならんやろうけど、自主的な、主体的なそういう活動すら押さえつけていこうとする。そのこと自体がナンセンスやと思うんやけどね。あとからこないしてずつと考えてみたら、八鹿高校の教師集団、また教師らが取つてきとる行為いうものは、やっぱりすべての面で反解同、反部落民のイデオ



ロギーが入つとるなあと思いますな。

—— まあ、部落研があるから（解放研を）認めないと言うのは形式論理ですわ。

安井 そらあ、パツと聞いたらね、「そややなあ、部落研があるから、解放研は要らへんわなあ」いう単純な考え方になるけど、よう考えたらおかしな話やな、教師の姿勢としてね。

—— 部落研にない活動を解放研でやっていこうというこ
とで、なにも重複するものではないわけやな。

安井 六月の一泊研修会の主催は但同教（但馬同和教育研究協議会）がするわけです。北但の奨学生の場合は、確認、糾弾が全くなされてないような状況のなかで、奨学生集会……但馬文教府で一泊研修会を持つ意義はあったわけですわ。その内容をどういう風にしていくかということ、やっぱり確認、糾弾の実演をした方がええんではないかと、計画は同盟が但同教あたりへ言うて行つとるんです。で、事務連絡なんかは、但同教の高校部会が責任を持ってね。当時、但馬文教府の上田所長がかなり精力的に協力してくれましたね。ぼくらも文教府へ行つて話を聞いたりましたけどね。

—— 文教府というと、どんな性質のもんなんですか。

安井 県立の施設です。但馬の唯一の教育的な施設です

からね。研修所みたいなもんです。で、まあ計画はそういう風に確認会、糾弾会を研修内容に決めるわけですよ。丸尾さんを差別者側に立たさせて、高校生に追及させていこうと、ああ言うたら、こういう風に言う、討論式のもの、計画はするんですけど、研修会のなかで八鹿高校の問題がクローズアップされてくるんです。八鹿高校だけ解放研を認めんと言うし、この集会にたいしても「参加するな」と個別指導がなされとる、この辺はどないかなやと、みんな（討議した）。

—— 解放研の生徒に「参加するな」と……。

安井 解放研はまだできてないわけだから、その研修会に出席しようとしとる部落出身の生徒にたいしてね。そのことを、日高や出石や但馬の高校生がみんなで討議するわけです。その時はぼくは遅れて行ったんやけど、行つたらすでに（八鹿高校の）校長と……最初の時は教頭だけ出席しとったんかな。それをみんなが追及していったんと違うかな。八鹿高校の問題だけで……で、計画されとった確認、糾弾会がほんまに実演になつてしまった。—— 丸尾さんを差別者に仕立てたそれはあったんですか。安井 いや、なかったんです。一泊研修会というのは、八鹿高校の教頭を追及していく場になつてしまった。「なんで、そんな。解放研認められへん」と。それで終わつ

てしもうて、次の分が一週間後に……六月二十九日やつたかな。その日に二回目をやって、校長が出席して、（解放研設置を）認めさせたわけですね。「解放研を作るのは、校長の責任において作るから」いう確約取つてね。それを職員会議に言ったところ、教員の座り込みが始まるわけですわ。校長室で、「撤回せえ」言うてね。七月三十日だったか、校長の職権で解放研が設置されるわけです。それまでも、七月二十日から夏休みに入るんやけど、終業式なんか、各クラスで変則的な終業式をやつとるわけですわ、八鹿高校の教師集団がね。それはなんでかというと、「青年行動隊が終業式に乱入してくる恐れがあるから」言うてね。ほかにはN子さんらのアピールの問題もあつたんやろね。また、なんらかの形でアピールでもあつたらかなわんとか、青行隊が校内に入つて来て、終業式を妨害する恐れがあるんと違うかいデマが流されとつたらしいです。差別者の典型といふのかな、こっちはそんなことなんにも計画も考えたこともないのに、向こうがやつぱり組織的に（やつとる）。やつぱり怖かつたんやろね、青行隊が。そらあ、八鹿の教師にしたら脅威やつたんやと思いますわ。（自動車もすぐに出られるような態勢にしといて、終業式を各クラスでやつた。PTAも笑つて、笑つてな。そういう態勢をとつたらし

いわ。

——南但地協として、八鹿高校の差別教育を糾弾しようという方針を出したのは、いつごろのこと？

安井 ううーんとね。そういうようにして、七月の末に解放研ができる。やつぱし向こうは生徒会の執行部使つたり、直接いける部落の子どもをつかまえて妨害してきとつたでね、解放研できてからでも……。九月に入って、九月の八、九日に元津闘争（日共の差別キャンペーンにたいする糾弾闘争）がありましたわな。これは、まあ、有志連ピラを日共の黨員らが元津（朝来町）においてピラまきしとつた。それを青行隊が見つけて……見つけてというよりも、元津の住民から「こんなピラが入つとる」いうことで、すぐに青行隊のメンバーが行つて、現場をおさえるわけですわな。そのなかでも、やつぱり片山の名前が出てきとるし、片山という名前を聞きだしてから相当何回も何回も片山という名前が聞かれるようになりましてわな。事実、元津闘争のなかでも、片山も来とつたという話を聞かされたし、それから十月に入って、橋本哲朗の糾弾闘争を一週間やって、それに完全勝利するなかで、八鹿高校の解放研の子どもらが話し合いを求めていくようになるんです。

これは大きな闘いばかりですけど、大量動員して闘

い抜いた元津とか橋本哲朗闘争のほかに、日常的には各支部で要求闘争や差別確認会や糾弾会も行なわれていたさかいに、青年も三班ぐらいに分かれて行ったりしましたな。関宮町で「えたのシシ分け」差別事件があったり、大屋町では木村民子の差別発言があったりね。養父町では、秋山国太郎の差別発言とか但馬プロイラーの就職差別とか、町同教の差別事件とか、もう毎日あったね。山東町でもあったし、生野町でも生野小学校の差別発言とか、各地域で差別事件をかかえとったね。確認、糾弾は一回で終わるんじゃないしに、もちろん差別者にたいしては自己批判もさせんならんだけど、行政をたたき直していかなあかんと、かなり継続的に行なわれておりましたわ。「えたのシシ分け」の関宮町あたりは、五、六回ぐらい続いとると違うかな。次から次に出てくるというのか、行政のポロが出てくるわけです。それを確認させるのに時間もかかりよったし、当時夜中の二時や三時といったザラでしたな。晩の八時ごろから始めてね、夜が明けから帰るのが何回もあつたしね。

——昼、仕事があるから、夜やつたわけですか。

安井 ええ、そうです。確認、糾弾会は全部夜でした。青年もみな職業も持つとるし……。そやけど「確認、糾弾会をたとえ朝までやつても、仕事を休むような青年は参加

するな」言うてね。かなり青行隊のなかでも、きびしく、自分にきびしさを持たせるようにしとったしね。男女交際のことでも、個人的に運動からはなれて交際するのはいいけど、運動のなかでの交際は認めんいうことだね。「そんなんやつたら、青年部から離れて、交際してくれ」と。現在でもあるんやけど、(和田山町の)但馬銀行跡に八十人ぐらい寄りよつたからね。部落の青年が一回会議持つたらね、当時は。

それから、四十九年の六月か七月ごろに、私の支部の青年部が生まれたんが初めですわ。南但青年部は四十八年の十月にできてましたけど、各支部の青年部は四十九年の六月ごろから、ザアツと(できた)。それまで支部活動も青年がしていたんだけど、南但の場合は、南但地区のことを……まあ、ひとつの部落で闘いがあつたら、どこの支部もそこへ結集したりして、全体的な活動を青年がやつとつたんです。あちこちの支部に次々と青年部ができていったね。そういう青年が毎回青年部の会議で各支部の活動報告や各地区でどういうことを計画しとるか、そういう状況報告をしたり、山田久の糾弾闘争も継続されてましたから、今後どういう風に展開していくとか話しあいましたね。あのう、リーダーだけじゃなしに、全員を集めてやりよりました。多い時は八十人ぐら

い寄りよつたんやろうね。

解放教育のあり方について話し合いを求めた

——八鹿高校の解放研は夏休みがあけてから、どうなつていったんやろうね。

安井 橋本闘争以後、解放研の子どもらもカチツとした活動方針が定まってきたんやろうね。それまでは林田さんあたりが中心になって活動をやつつたんやけど、教師の妨害があり、解放研が設置されても、やつぱり生徒会なり教師なりから妨害を受けてきとるでね。「部室を撤去せよ」いう決議をもらつたりしてね、妨害を受けているんです。そのなかで、徐々に解放研の部員を増やしているところなんです。そういう態勢が朝来闘争、十一月になるんやけど、そのころに確立していったんやろうね。生徒会にも対抗していけるぐらいの内容になつてくるんやろうね。それで、教師にこう投げかけていつとるわけです、「話し合いせえ」と。で、その内容というのは、八鹿高校の同和教育についてですわ。

——教師との話し合いを求めた？

安井 そうです。そやけど、かれら（教師）は先々要らん解釈をするわけですわ。たとえば、「解放研は部落解放同盟の尖兵や」とかね。「話し合いといつても、おそらく

一方的な話し合いになるやろう」とかね。というのは、いままでの各町の確認、糾弾会の実態を聞かされたり、日共から情報を得たりして、「おそらく屈服させられるのが、関の山やろう」と、話し合いすら応じないような態勢をかれらなりに考えてきたんやろうね。職員会議で「話し合いをすべきか、せん方がよいか」と賛否まで取つて、議決までしたんやからね。で、まあ、圧倒的多数で「しない」いうことになった。

——解放研が求めた話し合いの中味はなんだつたんやね、三項目があつたんかな。

安井 あれは糾弾闘争に入つてからですわ。

——そうすると、最初の話し合いの要請は、八鹿高校の同和教育の全般についてということだつたんですか。

安井 ええ、そうです。それを、同対室の顧問を高本清笹がやつとるんやけど、高本を通じて話し合いをしていくんやけど、結局破棄されてしまふんやね。一回、二回、三回ぐらい話し合つて、最終的には高本つかまえて、職員室まで押しかけて行って、「なんで話し合いせんのか」と言うてね。そのなかで、高本といろいろ話し合っている時に、ほかの教師集団が高本をスクラム組むような形で校外逃亡をはかつてしまう。生徒としたらやつぱし「解放研ということが認められんのやつたら、八鹿高校の

生徒として話し合いさせ」と。これはひとつの理屈ですわな。教師集団は「個人としては話し合いをしたいけれど、職員会議の方で話し合いに応じんと決まったから、話し合いできん」と。

——それは、個人としても話し合うということについて
も、職員会議で「応じない」という方針だったんですか。

安井 その辺が、部落出身の生徒らの気持ちが理解できとつたらね。個人的にでも話し合いはできとつたと思うんやけど、それだけの締めつけがあつたんやろうね。個人の行動よりも組合の行動を最優先させていく。それはやっぱり訓練された組合団体だつたと思いますわ。八鹿高校というたら、兵高組のなかでも中枢的な役割を果たしとつた。片山らを中心とした各サブ的な人間がカツチリと押さえとつたんやね。

——個人的にも先生のなかに解放研に所属する生徒と話し合ってみようとする先生はなかつたんやろうか。
それはもう駄目だという組合方針が出ていたから、一切廊下で会つても話をしないし、声もかけないということやつたんやろうか。

安井 そうです。やっぱり敵視してきとつたんやろうね、解放研が設置された時点だね。

——八鹿高校の同和教育の根本はなんかということ、南但地協ではどんなようにとらえていたんやろうね。
安井 うーんとね、四十五年ごろから、八鹿高校の同和教育がなされてきとるんでね。当時の内容というのは、「橋のない川」を上映してみたり、一部も二部もね。それから、東上高志あたりがかなり入つてきとりますわ。京都の部落問題研究所の人がね。特徴いうたら、「傷のなめ合い」いうのか、差別を騒ぐことも必要だけど、仲間を広げて、まず仲間を作つていかなあかんのやと。そういうことから、林田さんあたりも、なんか自分がひとつの部落民の教材としてやね、部落研の教材になつてしまつ



八鹿高校差別事件の第一回公判
(1975年5月30日 神戸地方裁判所前)

ていたということやね。そのなかで、現実存在する部落差別にたいして、部落研がどういうように対応しているのかという教育が全くなされんまま、ただ仲間を一人でもようけ作っていこうと。そうしたこと、えつたの(だれだれ)ちゃんであったり、映画の上映活動をやっても(だれだれ)ちゃんも大きくなつたら、あんな目に会わんならんのか」とかね。部落差別の本質がやっぱり理解されてなかった。教師自体も、片山らの書いたもんを見たら、教育的にはものすごくやつとるような報告を出しとるけどね。ほかの教師の無責任さを、八鹿高校の教師集団として組合的に使つとつたんやろうね。二、三人の教師ががんばつとるだけでね、あとの教師は知らん顔。それを八鹿高校の分会という形で資料を出したらね、「八鹿高校は真面目にやつとるんやな」という評価になつたんでしよう。

——このあいだ八鹿高校の朝来分校の先生をやつとつた人に会つて、話を聞いたら「大部分の先生は部落問題をやよう分からへんだのや。だから一部の先生が部落に入つて学習をやつとつて教えるような立場にあるから、あの人たちの言うことを聞いたいたら、間違いないだろうと付いて行った人が多いのと違うかなあ」と言うてたけどね。

安井　そうです。「担任袋」というプリントだったかな、前川いう教師がね、切々と書いとるわけですわ。「特別同和教育の時間が迫つてくると、死刑台上に上がるような思いで教壇に立たなあかん」と。あれが本音やと思いますわ。——なにをしゃべつていいのか、どう教えていいのか分からへんかったのやろうね。

安井　自信がないものが教壇に立つて、まして部落出身の子どもらがいままでのように黙つたらへん、黙つて聞かへん。先生の話にたいして疑問を持つたら、追及してくるからね。その辺のことで、教師という面目もあるしね、居ても立つてもおられへん気持ち……かといつて同和教育にたいして自分も努力しているのかというところ、うじやない。片山らが部落のなかで聞きとつてきたことの内容しか自分らは知つてないし、全く自信のないなかで同和教育がなされておつたんじやないかと思えますね。——解放研ができて、同和教育にたいする要求を出してくるのを、ともに受けて立つ自信はなかつたみたいですね。

安井　そらあもう、かれらは生徒として見てなかつたんやろうなあ。

——部落出身の生徒については、ずっと「解同の尖兵」という形で見とつたんやろうか。

安井　そうですね。やっぱし運動自体あたりが直接学校へ行つて……かれらは不当な教育介入だといえますけどね、その辺はぼくも分かつたけど。結局、糾弾闘争が始まってから、生徒の保護者を中心にして（学校に）くり込んで行つとるしね。不当な介入だって、生徒との話し合いすら認めへん教師がようもそんなことを（言えた）ね。かといって、八鹿高校の同和教育が真剣になされとるんかというのと、そうでない。そういうこと自体がな（問題やな）。差別者の側になってみな、分かんないなあ。どういふ思いで解放研の生徒、特に部落出身の生徒、活動的な生徒らにたいして、どういふ意識を（教師らが）持つとつたんか。そらあ、このままやつたら、かれらの民主的な組合活動が破壊されてしまうと思つたんやろうね。同盟の運動の力量によつてね。そのことが一番頭にあつたんと違うかな。生徒やそんなことよりも、自分らがいまおかれとる安泰感、安定感……校長の職権よりも育友会よりも、八鹿憲法いか民主憲法というとつたものを最優先させてたんやからね。部落の生徒を口実に同盟が入つてきたら、おそらく今の八鹿高校の姿がなくなってしまうんや、自分らの身の安泰をはかるためにもやな、（絶対受け入れられなかつた）。

高校だけじゃなしに、中学校にもそういう形ができて

ができてとつたからね。やっぱし同盟と連帯して、（解放教育を）すすめていくような教師もあつたし、学校全体もそうやつたしね。その姿を見て、あんなことになつたらかなわんない教師らの考えもあつたんやろうね。前段で、朝来の闘争があつたしね。橋本が各分会の糾弾声明を受けて、外堀を埋められたあとの八鹿高校だけが、（日共の）牙城やとやうてね。当時の支部長会議でも、朝来闘争時分にはすでに八鹿高校が但馬の牙城やと言われていた。民主教育じゃなしに、日共の牙城やね。片山を中心とする、部落解放同盟に敵対してくる牙城やないかと、だいぶ出とりましたわ。いつかは八鹿高校をたいていかんならんという話は出とりましたけどね。

——八鹿の先生は「民主主義の最後の砦や」という認識やつたんやろうね。

安井　そうですね、自称ね。しかし、部落の子どもらが辱しめを受けたり、惨めな学校生活を送つとるなかでの民主教育はありえんと、ぼくらはそう解釈しとつたけれどね。「なにが、民主教育やツ」と。

——　　「そうやな。部落出身の生徒が（特別同和教育の）教材扱ひされとるいふことがね。」

安井　それは多分にあつたよ。表沙汰になつとるそういう事象があるんやから、教師の間や生徒の間で、どれだ

けの日常茶飯事のように、差別言辞がなされたことかと思わな。特に当時は職業科と普通科がいっしょにあつたなかで、職業科にたいする教師の対応は全く百八十度（普通科と）違った形のものもあるしね。エリート校としてのイメージ持ったんやろうね、特に生徒会執行部あたりは……。

私も結婚差別を受けた

——もうひとつ、部落のなかの生活実態の差別状況について聞けると良かったんやけど、時間があまりないなあ。

安井 ぼくはやっぱり運動に入ったのは、結婚差別というか、一般地区の嫁さんもらつとるんやけど。青年が寄つてワイワイ言うのは、ぼくも嫌な方じゃなかったし、それから世話なんかもそんなに好かん方じゃなかったしね。職場はいっしょに丸尾（良昭）さんとおつたわけで、こんな運動に入ってきたわけなんです。職場つて、新日本運輸におつたんですわ。ぼくはトラックの運転手で、丸尾さんは整備やつとつた。それで、会社のなかではその話はしなかつたけど、丸尾さんは世話好きやつたし、ぼくも好かん方ではなかつたし、まあ自然と気が合うて……。ぼくがこの運動に入つてきて、差別を無うして

いかなあかんと思つたのは、結婚する時に、こっち側の反対はあらへんけど、やっぱり相手側の反対があつたんです。

——奥さんはこの近くの人？

安井 そうです。日高町（城崎郡）の方です。両親はそんなに反対しなかつたやろうけど、親戚関係がね。それで、ぼくが嫁に当たつたこともあるしね。「どこが違うんやあ」言うことで。それからやっぱり真剣に考えて、部落問題にかかわるようになってきました。そのかわり、学習会のなかでも、あのう、自分の体験を話に出してね。

——いつ結婚した？

安井 二十二歳の時やから、ちようど十年前かな。四十六年ですわね。その時分から、ボチボチと……。四十七年には、もう南但民主化協議会の青年部として動いとりましたから。南民協の青年部ができたのが、四十七年でしたわ。そういう結婚差別の話をしたり、こういう風に差別されてきたんやいう話は、やっぱりみんな同じ思いやからね、部落民は……。

——それで、山田久の差別事件と結びついて……。

安井 バシツと通つてしまった。そしたら、おばちゃんらも立ち上がつて、マイクを持つひとつの作業もようせなんだのが、怒りの方が先に出てやね、涙を流しながら、

自分の体験談を行政にぶつけて行く。その差別された思いはみないつしよやらね。途中の話のなかで相づちをうって、「そうだ、そうだ」と言うような、学習がすめられていった。それから、婦人の話によく通る（理解できる）しね。また、婦人ほど、こうこれだけ差別受けるなかでも、家庭のなかでもやっぱり不利益な立場に立つてる人が発言するのは説得力もあるしね。

聞き書きメモ

① 今回の聞き書きの安井義隆さんは兵庫県養父郡養父町の被差別部落に生まれた。この部落では、安井姓が非常に多くて、「安井」といわれることが差別の代名詞であったという。安井さんは聞き書きにあるように、南民協時代から青年部に参加していたが、山田久差別文書事件糾弾闘争を契機にして組織された青年行動隊（青行隊）の隊長として、多くの確認会、糾弾会の先頭で闘った。そのために、警察権力によって「八鹿事件の被告」にされるといふ弾圧を受けている。安井さんは部落解放同盟兵庫県連の支部が南但馬で結成されて以降の、丹念な闘争日誌を書いていて、それを見せても

らったおかげで、「生きて闘って—南但馬の部落差別と解放運動」という聞きとり調査の本をまとめるのに、大変役に立った記憶がある。

② 安井さんの聞きとりは、一九八一年八月十六日に二時間半にわたって、南但地協の事務所で行った。テープは省略したところもほとんど書き起こしたものである。

（たみや たけし・社会学部教員）

サチユルニヤンの自覚

山村嘉己

1

その名に恥ぢぬ昔の「聖者」たちは信じていたのだ、
—もつともこれにはまだまだ不明な処も多いけれど
夜空の星に 凶運も読みとれて

人の魂は誰だつて星の運まめに結ばれているのだと。
(人々は何度嘲笑あざわらつたことだろう)

この星占いの神秘に満ちた解釈を、
その笑いのいかに愚かで滑稽かも知らず)

ところで、降神術師の好む あの忌わしい星

「サチユルヌ(土星)」の下に生まれた人々は

古い物の本に従えば 中でもきわだつて

たつぷりの不幸を悲哀とを与えられているという

不安でひ弱な「想像力」がありすぎて

「理性」の力も信じられないとか、

彼らの血管には毒のように秘やかに けれども

熔岩のように燃える血が 薄いながらに沸き立ち流れ

じゅうじゅうと音立てて 哀れな「理想」を押し流す

所詮「サチユルニヤン」はこのように苦しみ

—いざれわれらは死ぬしかないが—死なねばならぬ

その人生の行く道は 一行々々 きつちりと

悪意の「力」で引かれているのだ。

これはヴェルレーヌの第一詩集『土星人の歌』の序詩として、ウージェヌ・カリエール（彼よりやや年下の画家、彼の肖像画を残している）に捧げる形で書かれたものであるが、そのいささかふざけたような、詩的といつても一種の戯文調の語り口に、かえって青春の深い悲しみと絶望感が溢れていて興味をそそられる。ヴェルレーヌはその人生への出発においてすでに自らを忌われ人、サチュルニャンと規定し終つていたのである。すでに述べたように彼の生涯を通じての絶唱とも言ふべき「秋の歌」もこの詩集に含まれ、人生の到達点といえる《死》を出発点としてその逆の生き方を敢えて選びとる青年の客気ともいふべきものを示しているのだ。

この詩集は一八六六年十一月、高踏派の理解者だったルメールの書店からヴェルレーヌの自費によつて出版された。もつともこの自費というのも、彼の最初の意中の女性ともいふべき従妹エリザ・モンコンブルから提供されたというのが実際である。ヴェルレーヌの女性関係についてははいずれ触れるとしても、このエリザについては少しふれておかねばなるまい。彼女は彼の従妹で年少の頃から親しんでいたが、この時はすでに人妻になつていたにも拘らず、彼のために力を貸したのであった。醜男（オランウータン）に似ていると言われた青年時のヴ

エルレーヌにとつて身近なこの優しい女性の寄せてくれる仄かな好意は身にしみて嬉しかったにちがいない。恐らくは詩集出版援助への感謝の心も含めて、この詩集のはじめに「Never More」として彼女との交情を美しく歌い出している。

思い出よ 思い出よ ぼくにどうしろとお言いなのか
秋、その日 鶉は曇つた空に舞い上り

北風の鳴りさわぐ黄葉の森に
陽はものうく光の矢をそそいでいたのだ。

ぼくたちは二人きりだった 夢見心地で歩いていた
あの人とぼく 髪の毛だけでなく物思いまで 風にな
びかせて。

突然 思いをこめた瞳を向けて 金鈴の音が響きわた
った。

「あなたの一番すばらしい日はいつでした？」

その声の優しく響き高かったこと、まるで天使の調べ
のように新鮮で。

物など言わず微笑みだけが返事であつた
そしてぼくは心を込めて白いその手に接吻をした。



エリザ・モンコンブル

— ああ はじめて咲く花 その香りの何と芳^{なほ}しいこと
そしてかくも愛^{いと}しい人の唇より流れ出るはじめての
ウイの囁きの
何と心をそそる嬉しいときめきよ

さらに続けて「三年後」の中でも、彼はレクリューズの彼女の家を訪れた時のことを

物は皆変つていない、またまた皆を眼にしたのだ
野性のぶどうのつつましやかな棚 いくつかの籐椅子。
噴水は変わらず白銀の囁きをもらし

年老いた柳はつきせぬ恨み節^{せむし}を聞かせてくれる。

とここにもはや帰らぬ彼女を嘆いているのである。

2

ところで、このようにあえて凶運の星を選んで新しい方向に進もうとしたヴェルレーヌではあるが、このサチュルニヤンという言葉がすでにユゴー、ボードレールの使用したものであるように、『サチュルニヤン詩集』には必ずしも独創的な作品ばかりが収められていたわけではない。(J・ロビシエの指摘するところによれば、ユゴーの『瞑想詩集』に「サチュルヌ」と題する詩があり、ボードレールに到ってはこの一八六六年の『現代高踏派詩集』に「処断詩集への銘句」を發表しており、その詩には次のような一節があるという。(『ガルニエ・クラシック』による)

心静かにのどやかな読者／単純素朴な慈善家ならば
乱痴氣騒ぎで 嘆き顔の／このサチュルヌの本は投げ
すてように

ヴェルレーヌをはじめこの詩集にただ『詩とソネット』

という題を考えたらしい。)多くの先人を意識したの
はたしかであるが、中でもボードレールは筆頭にあげら
れるであろう。フランソワ・コペに捧げた「パリ素描」、
親友ルベルチェに捧げた「パリ夜曲」などはその題名か
らもボードレールを意識していたことが分る。もつとも
ボードレールの莊重さに比較して、より軽快で皮肉を利
かした面があることに注目したいが。

月は鈍い角度から

鉛の光沢をはりつけていた

とんがり屋根の高みから 黒々と切れ目なく

5の字の形に 煙がはき出されていた

空は灰色にくすみ 北風は泣いていた

ちようどバースンのように。

遠くで 寒がりの内気な牡猫が

泣いていた 奇妙なひ弱な声出して、

ぼくはと言えば 歩いていたのだ、

聖プラトンを フイディアスを

サラミナやマラソンを夢見ながら

ガス燈の青い炎のまばたく下を。

一方、高踏派の巨匠ルコント・ド・リールの影響も少
なくはない。とくに印度に素材を得て「マハバラータ」
から「サヴィトリ」を作つてみたり、「セザール・ボルヂ
ア」や「フィリップ二世の死」のような歴史的事実を展
開してみせたりし、鈴木信太郎氏も指摘するように、そ
の「プロローグ」では行動と夢の分裂から生じる詩人の
諦観を歌い、「エピローグ」では靈感を捨てて鏤骨の創作
苦を詠えるなど、はつきり高踏派的な理論を展開してい
る。これは要するに「サチュルニャン詩集」には雑多な
ものの集積があつて、必ずしも純一なヴェルレーヌ像が
見られるわけではないということであろう。それはこの



ペアロン筆
「サチュルニャン詩集」挿絵

三十九篇からなる処女詩集が十分に推敲を経ずに、その当時までに書かれた雑多な作品を寄せ集めたにすぎないことを示している。ボードレールが「悪の華」にかけた徹底的な作品構成とはその意味ではまったく対象的といわねばなるまい。われわれはすでにその出発点においてヴェルレーヌの持つ一つの限界に気づかざるを得ない。それは彼が本質的に神経症の、感覺的世界の詩人であることを無視できないということであろう。従つてこの詩集では「悲しき風景」と名づける七篇の集まりにもつともヴェルレーヌ的なものが姿を現わしていると言えるかも知れない。

3

この「悲しき風景」の冒頭をかざる「夕陽」についてはすでに前回に紹介した。もつとも有名な「秋の歌」についていろいろな述べたことがある。そこで残つた詩篇の一、二をのぞいてみよう。先ず眼につくのはⅡの「神秘な昔昏」であろう。すぐに思い浮かべられるのはボードレールの「黄昏」であり、「神秘な」という形容詞もまた彼の好むところであつた。しかし、この詩は十三行、句読点なしの書き流しとなり、不思議な流れのリズムを形造るとともに、ボードレールの悔恨の鋭い矢を巧みに

打ち消している。

「思い出」が「黄昏」とともに

赤らみ 燃え上る「希望」の

熱い地平に打ちふるえ 遠去かる

その「希望」の不思議な垣根となつて

打ちひろがるあたり、乱れ咲く

―ダリヤ、百合、チューリップ、そして金鳳花―

格子のまわりに花と開き まき散らす

胸ふたぐ熱い香り

病いの吐息のように その毒は

―ダリヤ、百合、チューリップ、そして金鳳花―

私の身体を、心を、理性を蕩けさせ

果てしない眩暈の中に 融け合う

「思い出」とともに「黄昏」は。

もちろん、ここに繰り展げられている光景は「黄昏」であり、そこに咲き乱れる花々にちがいない。しかし、その中にまさに「遠去かる」希望のイメージそのまま、ヴェルレーヌの自我がたゆとうている。ロビシエが指摘するとおり、「悲しき風景」はほとんどが「黄昏の風景」であり、それは自らを晦冥にし、自ら溺れ込む意識の象

徴なのである(ガルニエ・クラシックのノート五二〇頁)
Ⅲの「感傷的散步」もこれに劣らずヴェルレーヌ的な
作品であろう。

夕陽は最後の光を矢と放っていた
風は蒼ざめた睡蓮の花をあやすようだった。
芦の中の大きな睡蓮の花は
静かな水面にわびしく光っていた。
胸の痛みをさすらわせ ただ一人 池のひとり
柳のかげを 私さまよっていた
おぼろな霧に乳色の大きな幻があらわれ



ペアロンによるデッサン (1869)

悲痛を語り 小鴨の声に合わせて
泣くのだった 鳥たちは
胸の痛みをさすらわせ 私一人
淋しくさすらう柳のかげに
羽うちかわし 鳴き合っていた。
やがて 夕闇の厚いとばりが降り
蒼い波間に 沈む陽の
最後の光を溺れさせた
そして 睡蓮も 芦の中に
大きな睡蓮も 静かな水の面に

ここにはたしかに「私」が顔を出し、その孤独を訴えかけているように見える。しかし、この「私」もまた展開しつつ広がる夕景の中に漠として消え去ろうとする。鈴木氏の指摘する《漠然とした悲哀感》が、《一種の神経の刺戟であり、一種の精神状態であり、個有の純粹感覚》(岩波、「ヴェルレーヌ詩集」解説、一七一頁)がたゆとうばかりである。そして、それを際立たせるのがボードレルを思わせながら、しかも全く異った詩法であって、やはり鈴木氏の言葉を借りるなら《sinostie》(曲折)とでも言うべき影像と影像、感覚と感覚の二重映し、重層的な継起なのである。この詩における同一語句、同一

イメージの繰り返しに注意を傾けてほしい。翻訳のまずさがあって分明ではないかも知れないが、《十六行の詩句の中に、蓮が四回、沈む日のいまはの光が二回、和ぎわたる水面が二回、芦間にはが二回、ただひとりさまよふが二回、柳かげが二回、全く異った語の如くに現れては消え、現れては消え、これらの語が詩の全面に指導的印象を与へながら、昔のロンドオとは全く異なる新鮮な感覚を浮び上らせる》(同上)という指摘は全く正しいといえよう、すでに述べた「夕陽」においてもこの手法は際立っており、「悲しき風景」の最後を飾る「鶯」においても同様である。

驚いて騒ぎ飛び立つ鳥の群のように、
想い出はすべて私に襲いかかる、
傍を憂いを込めて流れて行く

「悔恨」のすみれ色の水面にうつる
榛の木みんもの曲つた幹を似姿に

黄色の葉を繁らせる 私の心に襲いかかる、
襲いかかるこのざわめきは

立ちのぼるそよ風に静められ、
やがて木の間に消えて、かくて

一瞬ののち 聞えてくる物音何一つなく

「なき女じよ」をしのぶ声のほかには何一つ、
あんなにもものういー声のほかには何一つ—
私の「初恋」だったあの鳥の

今もなお初めの日のように歌う声のほかには。

そして 悲しげに光る月の輝きのなかに

蒼白く 厳かに立ちのぼる

憂わしく重い夏の夜は

しじまと暗闇とにみちみちて

やさしい風の吹きすぎる大空をゆりかごに

ふるえる木 涙する鳥を静かにあやす。

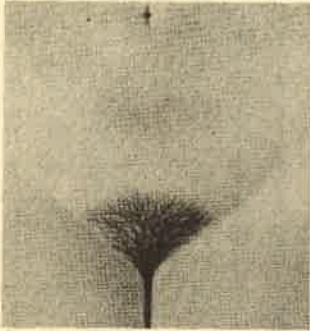
4

以上で「サチュルニヤン詩集」に見られるヴェルレーヌの特色について大体ふれ終ったが、もう一度この詩集の構成を見直してみると、総数三十九の詩篇が

序詩(1)、メランコリア(8)、エッチング(5)、悲しき風景
(7)、気まぐれ(5)、その他(12)、エピソード(1) (内は詩
篇の数)

という風に分類されている。とくに「その他」とした部分は筆者がそのように判断したので、ヴェルレーヌは「気まぐれ」の部分に入ると考えていたのかも知れない。また、ここにはすでに他に発表した詩篇を十一も含み、

組織部員募集!!



組織部員を募集しています

生協新聞・書評誌の編集発行、講演会・映画の開催など、文化・教育活動を自らの手で作り上げてみませんか。

● 連絡先

生協本館3F・組織部内

☎ 38719998 (直通)

☎ 388111221 (内線4821)

その他、中学生時代に書いた詩もあるというから、全篇が十分な推敲を経たものであるかどうかは疑わしい。この点でもボードレールの『悪の華』が完全な詩人の統御の中に完成されたのとは較べるべくもない。ただ、いくつか紹介した詩が示すように、ヴェルレーヌの特異な才はここでもすでに十分にその姿をのぞかせているということができよう。この詩集はわずか五百部しか出版されなかつたが、ヴェルレーヌは多くの先輩、友人にこれを贈呈している。そしてその反応は儀礼的な意図を割引きにしても、かなり熱烈なものであつた。現在手許に資料を欠くので堀口大学氏の『ヴェルレーヌ詩集』の解説を

拝借しておく。

詩壇の大先輩、ルコント・ド・リールは言ってくれた。

「集中の詩篇はすべてきわめて巧み、やがて詩の奥義をきわめるはずの真の詩人の作だ」云々。同じく先輩詩人のバンヴィルは、病中の疲労も忘れ、十回も繰りかえして愛読したと言っている。そして心から感動したが、君は真のオリジナリテイを持つ詩人だと言いきつた上で、自分のように詩を天職として生きる者は、真の生命を持つ詩以外のものに感動したりするおぼしさは持たないと念を押し、さて、「君は現代詩人中、最

高の位置を占める運命の人だと言つても誤りではないと確信する」と予言までしているが、これが誤りでなかつたことは、未来が立証してくれた。

当時、ブザンソンの片田舎にあつて、高校の英語教師をしていたマラルメの礼状は、真情に溢れていてまことにたのもし。

「まだお目にかかつたことのない小生に、ご新著を賜わるお氣持の中に、文学上の同感がありなことは勿論ですが、それ以外に、未来の友情の神秘的な予感も含まれていると見るお許しもいただけたと思います。：

…貴兄の詩集は、その美しい点、ロマンティックな点、あらゆる意味で立派な第一詩集だと思います。そして小生を嘆かせます、もしも自分に、完成した作品を、それも、極限に達した上でだけ、発表しようという野心さえなかつたら、自分もこんな詩集が出せるはずなのにと」。マラルメがヴェルレーヌに宛てたこの最初の手紙は、『土星の子の歌』に対する批判を告げるばかりでなく、その末段に、偽りのない、この完璧を目ざす孤高の詩人の、心がまえが窺えて重要だ。

「僕の日没が君の夜明けに敬礼する。……行け若者よ、芸術の道は無窮だ、そしてこの暗黒な大世界における君こそは光明だ」と、ほめそやしたユゴーの讃辞は、

大袈裟すぎて眉つばものの感じを与えたかもしれないが、十九世紀が持ったフランス第一の文芸評論家サント・ブーヴが、この無名の青年詩人の出発を祝した手紙は、何よりのはなむけだつたと思われる、

「……君に才能のあることは確かだ、そして私はまず君の才能に敬意を表す。君の望みは遠大だ。君は消えやすいインスピレーションだけでは満足していない。

……風景詩人としての君は写生の軽妙さと、生気ある夜の雰囲気描写に威力を持つ。すべて、月桂樹の葉をかじることを許された人々がそうであるように、君もまたかつて人の及ばなかつた高所を目標としているが、これはきわめて大切だ……」

(やまむら よしみ・文学部仏文科教員)

日本中国

ことばの来往 ゆきき

その22

芝田稔

消えていくことば——「大鍋飯」(2)

「大鍋飯」ター・クオフアン」ということばがある。これは『中日大辞典』によると：

- ① 大鍋でたく飯。
- ② 大人数のまかない、共同炊事。

また『現代中国語辞典』や中国の『現代漢語詞典』では「大人数をまかなう普通の食事」と説明しているから一般名詞である、といえないこともない。

だが『漢日辞典』は、以上の語義のほかに「吃大鍋飯

|| チー、ター・クオフアン、共同炊事をする（何から何まで同じ待遇を受けるた、え、）と拡大解釈しているのが注目される。

文革中に、いやそれより以前、人民公社が出現する前から、中国の農村に生れた「吃大鍋飯」という制度は、村人すべて、同じ待遇を受ける” という意味を有する食事の形態であった。もう少し突込んでいうなら、これは「共産主義」とは切っても切れない意味をもつことばとして、一時はありがたい、実体のあることばであったのだ。一九五七年後半から約一年ほどの間に、台風の如き威力と速度をもって、中国大陸を席捲したのが「大鍋

飯」であった。

この「大鍋飯」は、現代風にいえば「大食堂」ター・シートン」といいかえてもよいのであるが、それは今日の中国の大学や工場等にある大食堂と異なること、いうまでもない。では、どういう食堂であったのか？ その由来を明らかにせねばなるまい。

中国では解放後、土地解放につづいて、農民の組織化と農業生産の共同化をめざした。したがって、これまでの個人経営を廃止して集団化への道を進み、近隣同士が助け合う「互助組」を生み、さらにそれを「農業生産合作社」へと発展させ、そしてその行き着くところを「人民公社」に求めたのであった。

この過程で農村女性の解放が一段と高潮し、「婦女頂半辺天」婦人はこの世の半分を支えている」ということが生れるほど、婦人は生産現場でも自信をもって来たのである。

こうなると、女性も家庭から戸外に出て、直接農業生産の第一線で立ち働く。その結果、当然のことながら家事は夫婦で分担せざるを得なくなるのだが、中国農村での古い習慣は一向に改められないのであった。

旧中国での農村婦人は、家庭を守るのが勤めであり、漢字「安」の起源（会意文字）が物語っているように、

女性が家の中におさまっていてこそ、安らかである、と信じてきた伝統的観念から容易に抜け切れない。そんな夫が妻のことを、他人の前では「俺做飯的」アン・ツォファンダ、（おれの）飯たき」と呼び捨てにする習慣など、その端的な現われであるといえよう。

さて、この矛盾を解決しようとしたのが「大鍋飯」であり、これを「食堂」という新語に仕立てて全国に宣伝したのが、李准の小説『李双双伝』である。この作品は中国で映画化され、大へんな評判であった。日本でも上映されたが、内容は中国農村における社会主義の定着、女性の家庭からの解放、女性の生産現場への進出、家庭生活の改善、そして「食堂」の出現となる過程を、適確かつ面白く描写していた。

では、どうして「大鍋飯」が「共産主義」と深い関係にあるのか。

「人民公社は共産主義という天国に通じる橋梁である」ということが生れたように、農村での集団のための食堂は「共産主義」への第一段階であると見做されていたからである。だから、食堂を始めると決定すると、各戸が所有していた薪や藁等の燃料を、すべて一箇所に集め、鍋釜もすべて供出させてしまったのである。

ある合作社では国慶節を初日にして「食堂」経営を始

めた。慶祝の意を表わすために、共同所有の牛二頭、馬一頭を犠牲にしたという。もつとも、社員たちは耕牛や駄馬を犠牲にすることに反対したのだが、指導者の書記は、次のように説得した。

今後は耕牛や駄馬は不必要になる。……人民公社が成立すれば「衣食」の心配はなくなるのだ。……今後は、各自の能力を出し合い、必要なものは与えられることになるのだ。

かくして「大鍋飯」が始まったのであるが、結構なことに、家庭では到底できないことが、ここでは実現した。それは食べ放題ということであり、一食に「饅頭」マントウ、一種のムシパン」を十三個（約二・五kg）も食べ、たつわ者が現れて話題にもなった。

こうなると、左派も右派もなく、富農や反動分子の差別もなくなり、誰もが自由な労働者になった。だから、も早や「批判会」や「闘争会」も取消され、世の中が一ぺんに明るくなった。しかも食事は一切タダである。

思想改造のため、この農村で労働していたある知識人は生活費として支給されていた月額十八元の使い道に困り、その内の十元を郷里の妻宛に送金したほどであった。正に能力に応じて働き、求めに応じて与えられる、結構づくめの「大鍋飯」であったのだ。

だが、それは長続きしなかった。ある日、書記は皆を集めて訓示した。

やりくり上手な女でも米の無い炊事は出来やせん。倉庫の糶米は底をついた。今上部へ申請しているから、少しの辛棒だ。旧社会に受けたあの苦勞を思えば、がまんできるさ。

というわけで、わずか十八日で食堂経営が行詰り、餓えと困難がしばしばつづいたのである。これは極端な一例であるかも知れない。しかし、この事実が示すように、鳴物入りで成立した「大鍋飯」は、やがて中国農村から消え去ったのである。

「北大紅樓」附近の今昔

今夏六月、本学交換教授として遼寧大学に派遣され、学術交流の任務を終えてから、北京經由帰阪したのであるが、その北京滞在中に曾て北京大学の校長として有名な蔡元培の故居を訪ねることができた。そしてまた、八月には北京語言学院が主催した北京香山での「第一回国際漢語教育シンポジウム」に参加、報告し、閉会後四十年振りに「北大紅樓」の構内に入ることができた。以下その現状を紹介しておこう。



旧北京大学文學院「红楼」の正面玄関にある、重要文化財、を示すプレート

まず「北大红楼」ベイター、ホンロウ」から。この名称が示しているように、赤煉瓦四階建の建造物で、一八八一年八月に竣工した元北京大学文學院学舎のこと。今日まですでに六十七年もの風雪に耐えてきただけに、今は色もあせ、ややくすんで見える。というのには、すぐ西側宿舎跡の五階建新しいビルとのコントラストの所為かも知れない。

しかし、どっしりと風格をもつこの建物は、東西約六十米、南側中央は正面玄関、その上に二階のバルコニーが突き出ている。下をくぐって中に入ると、左右両方に二米幅の廊下、この廊下の両側に大小の部屋がつづく。

その行き着いたところで、また左右に曲る。この廊下は約二十米。だからこの建物を真上から見たとすれば、縦に長い「コ」の字型。正面玄関をつき抜けると、北側は広い「操場」ツアオチャン、運動場」で本学でいうなら、元の第一運動場の二倍もあつたろう。红楼は地下一階、地上四階。地下には倉庫の他に印刷場もあり、大学での刊行物や講義原稿まで自家印刷が可能であつたという。一階は事務室、二階の中央バルコニー付の部屋が教授室、その両側に会議室等があり、二階の一部と三、四階が教室であつた。

一九六六年五月、私は中国社会科学院語言研究所の招待を受けた中国語学会（会長故倉石武四郎）の代表团（团长故藤堂明保）一行五名に加えられて、解放後初めて中国を訪問した。それは私が北京を引揚げてからちようど二十年振りのことであり、北京滞在中の十日間は見るとの聞くもの、全て懐しさと新鮮さに感激の連続であつた。中でも市内での移動中の車内で、ピントもそこそこに、想い出多い「北大红楼」をカメラに収めた時の喜びは一入であつた。だが帰国後現像してみると、画面のブレがひどく、失敗であつた。

そんな体験があつてから、今夏八月までに、何回も北京を訪れたが、その都度「沙灘」シャタール」大街の

「紅樓」を撮りつづけてきた。だが、何時も素通りだった。今夏八月、四十年振りに学友Y氏と会い、氏の案内で構内に入ることができたのである。

北池子の北端、景山大街と丁字を為すところを右へ曲ると「沙灘大街」だが、今はこれを「五四大街」と呼んでいる。何せ、ここにある「北大紅樓」は一九一九年五月四日に爆発した「五四運動」発祥の拠点であり、中国近代化の出発点、新民主主義革命の発端となった記念すべき場所。旧称「沙灘大街」を「五四大街」と改称したのは、中国現代史に占めるこの地の位置付けを明確にするためであろうか。

そういえば「北大紅樓」の正面玄関左側に、つぎのようなプレートが嵌込んである。

全国重点文物保護單位（全国的重要文化財の意）

北京大学紅樓

中華人民共和国國務院一九六一年三月四日公布

北京市文物事業管理局一九八一年七月立

玄関右側には「中国博物館学会」の看板が見えるだけ。

この大きな建造物は、いまは北京市文物事業管理局の管理下におかれ、人の出入のない静かなたたずまいを見せている。それだけに往時のことを想うと、今のこの姿はその図体が大きいだけに一抹の寂しさを感じざるを得

なかつたのである。

では「紅樓」北側の運動場はどうか。いわゆる「五四運動」発祥の拠点となった広場であり、「北京大学校史」ではここを「民主広場」と呼んでいる。今この民主広場は全く昔の面影がない。あの広がった空間も、今はプレハブ二階建の事務室や倉庫が林立し、雑然というほかない。ただ広場のほぼ中央から北へ、鉄筋五階建の文化部の建物や三、四階建の宿舍が建ち並んで整然としている。曾ての文学院寄宿舎は、その向うで小さく見えていた。曾て一時期、この宿舍で学生生活を送った日々のことだが、懐しく想起されるのだが、余りの変貌に記憶が繋



北大紅樓の北側、大運動場の跡に建てられてある臨時事務所や倉庫等。

がらないのであった。われわれ同学四十名ほどのうち、ただ一人、今なお母校の構内で活躍しているY氏を、一瞬羨ましく思ったのは、その時であった。

「紅樓」を中心にして西北と東南何れも四、五百米の範圍に「北大三院」があつた。その頃の「北京の文学地図」は故奥野新太郎の麗筆に詳しく印象深い。殊に「沙灘」一帯に居住した文学者のプロフィールが面白い。丁玲が住んでいたという北河沿の公寓（アパート）は、私が学生であつた頃、その持主も代り「亜東飯店」と改名して、やはり部屋貸しをしていたが、今は形影すらもなく、北京美術館に通じる大街に消えてしまつてゐる。

次に北京大学校長蔡元培の故居を紹介しよう。

蔡元培が北京大学校長に就任したのは一九一七年一月、それから二七年八月張作霖の「大元帥令」によつて北京大学が「京師大学校」（北京の九大学を合併した大学）に吸収統合されたのを機会に辞任するまで約十年半在任した。もつとも、二九年八月「国立北京大学」に復帰独立するや、再度校長に迎えられたが、南京政府中央研究院院長に就任したため、以後北大との直接關係はなくなつた。

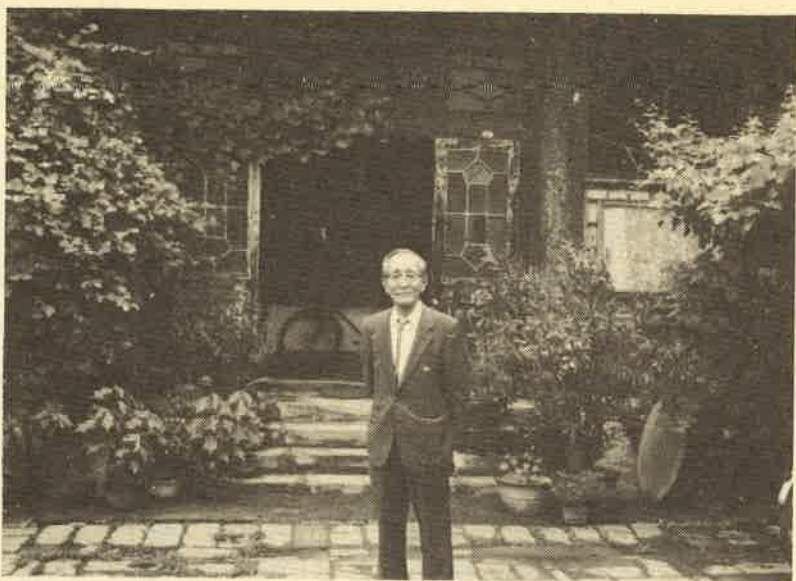
北京大学は、一九〇二年「京師大学堂」として創立されてから今年で八十三年。一九一一年辛亥革命後「北京大学」の初代校長は、翻訳家として有名な嚴復。袁世凱

の歿後、蔡元培が校長に就任すると、まず文科系の一新に着手、一七年一月には上海で「新青年」を主宰していた陳独秀を文科学長（文学院院长に相当）に迎え、同年十一月には李大釗を図書館主任に、胡適を教授に、さらに錢玄同、刘半農、沈尹默、馬叙倫、陳垣、周作人などの精鋭なる研究者学者を専任した。また二〇年から魯迅を講師に迎えたが、北京大学の校章は魯迅の設計に成る圖案で、現在もなおそれが襲用されている。

そのほか理科、法科にも専任を増加し、他校への兼任を禁ずる等、人事の刷新を断行し、これまでの封建官僚的な学風を一掃し、民主的で自由活発な研究活動に拍車をかけたのであつた。

また施設の面でも一八年八月には「紅樓」を竣工して大学の規模を整えた。その年の統計によると、全校教員総数二一七名、平均年令三三才、うち教授九〇名で、年少の教授は二七才。学生総数一、九八〇名、うち研究生（院生）一四八名で、中国最大規模の大学となつた。

ところで、校長蔡元培は第二院の西側、景山東街に面した大学官舎で執務していたのである。第二院といへば理学部であり、現在の沙灘後街にある。私の記憶では理学部の正門前に、学生相手の食堂があつた。時々利用したので、この辺の地理には今でも見憶えがある。理学部



元北京大学第二院(理学部)の西側にあった北京大学校長弁公室前での筆者。(7月2日)

には入ったことがないが、正門には一対の大理石造りの獅子が鎮座していたことを覚えていた。

今夏七月、遼寧大学からの帰途、北京在住の中国文法学者で有名な呂叔湘先生を自宅に訪問した後、その斡旋をして下さった「学校文法」で著名な張志公先生の職場を訪れたが、そこは意外にも旧北京大学理学院の建物であった。

出版社の幹部数名と会い懇談したのであるが、私が正門前の獅子がないことを話題にしたことから、急に親しみが増した。そして懇談会が終ると「蔡元培の故居」を案内しようということになった。

蔡元培の故居は、旧理学院の西側、景山東街の東側にある閑静な一角にある。門をくぐると稍広い庭があり、その奥、つまり北側に北京特有の「四合院」スーホーフアン、中庭を中心にして四方に一棟づつを配した住居の構成をいう「造りの居宅」があり、そのうち北側南向きの棟が「正房」チョンファン、母屋のこと」で、ここが蔡元培の故居である。この一角には四戸あって、それぞれ住人がいるはずだが、人声一つしない静かな中庭。案内してくれた人は誰に乞うこともなく、ずかずかと入り、自由に写真を撮らせてくれた。蔡元培が住んでいた時から七〇年近くなるからであろうか、朱塗りの頑丈な柱も、

今は色あせ、ひび割れもあらわに見受けられた。だが、中庭に蔭をつくるブドウ棚や瓜棚の手入れ具合や夾竹桃、ザクロなど鉢植盆栽の多いこと、中国文人の住居の典型を想い出すのに十分であった。

(しばた　みのる・文学部中国文学科教員)

お知らせ

投稿募集

最近読んだ本の書評・内容紹介・批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表・論文・エッセイも結構です。

詳細については、生協本部3F「書評」編集委員会までお問い合わせ下さい。

投稿規定は以下の通りです

- ▼原稿は原則として縦書きで、一行二五字、二二行（五〇〇字）を一枚と計算します。ただし短評は、一行二〇字、二〇行（四〇〇字）を一枚と計算し、五枚以内にまとめて下さい。
- ▼枚数は自由（ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります）。
- ▼締め切りは各月末日。

▼送り先 〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生生活協同組合「書評」編集委員会

☎(06)388-1121(内線4821)
(06)387-9998(直通)

▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入して下さい。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーをとっておいて下さい。



編 集 後 記

書評第七十六号をおとどけします。

今号は故小川雅也先生の追悼特集号です。

故小川雅也先生は生前、本誌に非常に御理解くださったり貴重な執筆者の一人として御活躍いただきました。今回故小川雅也先生と親交のあった各先生方や学生の皆さんの協力を得て、追悼特集を組むことになりました。故小川雅也先生の生前の交友関係に代表されるお人柄や学問的業績に少しでもせまれるものとなったのではないでしようか。

今号から、池田浩士先生の連載が始まります。乞ご期待下さい。

現在、軍事費GNP比%突破・国家秘密法制定策動・国鉄分割民営化攻撃・臨教審Ⅱ教育臨調路線という形で国内のあらゆる分野で帝国主義的再編攻撃が我々にかかけられています。このようなさまざまな攻撃に対する反撃の一つとして、今後、さまざまな特集を企画し、その問題について共に考えて行きたいと思えます。

■おわび■

今号掲載予定の書評「文学における差別表現」は執筆者の山田照美先生が急病のため、休載となりました。申し訳ありません。



1985年12月号 通巻76号

編集・発行 関西大学生協協同組合・総務部「書評」編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (TEL 388-1121 (内線 4821) or 387-9998)
頒 価 250円